「日露戦争従軍記」

昭和六年四月発行

著者　長畑　亀太郎

明治十一年出生

従軍当時二十六歳

当時岡山県勝田郡勝田村在住

（現　美作市久賀筏津）

昭和六年四月　発行

著者の進軍地図（左図）

独立第十師団（野津第四軍）広島宇品港より唐崎丸にて一九〇四年五月二十八日出港

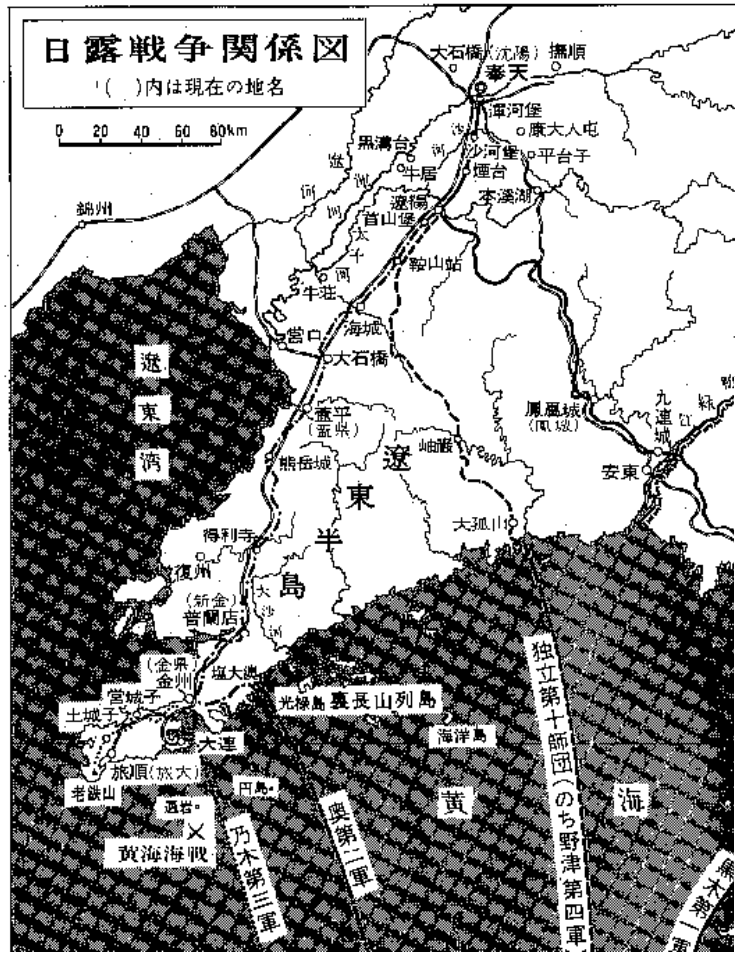
六月三日上陸

大孤山西方、抽厳の戦　柝木城の戦、遼陽の戦

沙河の戦、　奉天の大会戦など大小九回の戦いに参加

一九〇四年二月柳樹屯出港、兵庫和田岬へ上陸

姫路　大原　智頭を経て故郷に凱旋



従軍余話　一老兵の思い出

目　次

		頁
1.	動員令の一夜	1
2.	今生の別宴と首途	5
3.	入隊と最後の軍旗祭	11
4.	死出の晴着で愈々出征	16
5.	出征途上	22
6.	敵地の上陸	25
7.	抽厳の戦	27
8.	分水嶺の初陣とコサック騎兵	28
9.	戦闘地住民支那人の悲哀	37
10.	柝木城攻撃	44
11.	鳥取連隊第十一中隊の奮戦悪闘	49
12.	遼陽攻撃の端緒	57
13.	花々しき遼陽総攻撃	62
14.	陛下の万歳を叫ぶ上等兵の壮烈なる最後	67
15.	胆勇なる大隊長と連隊長の告別	71
16.	国民の後援	75
17.	神の加護と母の夢	81
18.	遼陽占領と痛快極まる入城	85

19. 沙河の大会戦 88
20. 三塊石山夜襲の壮挙 91
21. 西溝山と野村中尉 97
22. 戦友鎌田一等兵 103
23. 慰問袋 106
24. 対陣中の思い出 108
イ. 垢と虱の攻撃 108
ロ. 彼我の土産交換 109
ハ. 敵の看護婦 111
ニ. お正月の餅搗き 112
ホ. 餅の誤魔化し 114
ヘ. 酷寒の対陣 116
ト. 尿氷と糞柱 117
25. 未曾有の奉天大会戦 118
イ. 愈々死に時が来た 118
ロ. 攻撃中の雪達磨 120
ハ. 暗を蹴って柳匠屯に向う 121
ニ. 投糞放尿 123
ホ. ミルクと美人の写真 125
ヘ. 柳匠屯の悪戦苦闘 126
ト. 火災を前に追撃前進 131
チ. 伊勢の神風 133
リ. 奉天城占領 134

ヌ．　勇敢なる敵の逆襲　136
ル．顚覆する敵車両　139
ヲ．捕虜の群と分捕り品の山　141
ワ．牛肉隊司令官　144
カ．古林の抜群の奇功　145
ヨ．御神符の身代り　149
26．有難き親心の数々　152
27．安木節の看病　154
28．演武場　159
29．この親にしてこの子あり　163
30．凱旋　166
31．悲喜交々到る　173

序

日露戦争は強国露西亜の脅威に対して、我帝国が国運を賭して戦った有史以来の大合戦であった。日清戦争後十年間の亘る臥薪嘗胆挙国一致の力を以て、義勇奉公の大精神を発揮し以て正義を貫徹し得たことは、帝国の歴史上特筆大書し国民の寸時も忘れてはならぬ事柄である。爾来年月移りて既に二十六星霜を経、其当時従軍した軍人は年と共に其の数を減ずるのみならず、特に其実戦に臨みたる従軍者の著述の極めて稀にして其の感想の実際を語るものなきは頗る遺憾とする所である。

然るに歩兵軍曹長畑亀太郎君は当時第十師団歩兵第四十連隊に属して出征し奉天の大会戦に至るまで前後大小九回の激戦に参加し殊勲を樹て剣電弾雨の下に馳駆したる勇者である。爾来今日に至る迄在郷軍人会の幹部となり、或は小学校に教鞭を執り或は少年義勇団長を努め、或は青年団、在郷軍人分会、学校その他に於て本人独特の熱弁を以て実戦談をなしたること数知れぬと云う事である。誠に聴者をして感激せしめつつあると聞く。斯の如く社会公共に貢献すると共に家業に精勤しつつある誠忠

の士である。

近時国民の思潮が我が大和民族の伝統的皇室を中心とする義勇奉公の大精神の漸次頽廃しつつあるを歎じ、一年有半に亘って身血を注ぎ『従軍余話一老兵の思出』として本書を著わされたるは吾人の意を得たる所であって深く敬意を表する次第である。本書は実に尊き実戦感相談であって、而も出征の当初より戦場に於ける光景を躍如たらしめ、懦夫をして奮起せしむるのみならず、吾人従軍者にあっても亦能く当時を追懐して骨踊り血湧くの感がある。況や未だ実戦の経験なき在郷軍人諸士や亦第二の国民たるべき青少年諸士にして本書を読まれたならば大いに奮起自得せらるることがあろうと思う。聊か所感を記して序とし本書を推奨する所以である。

昭和六年三月　　岡山連隊区司令官

陸軍歩兵大佐　　本川省三

自序

私は岡山県勝田郡の片田舎に生まれて、陸軍の現役を終わってから二ヶ年郷里の小学校へ奉職していた。

時は明治三十七年春、日露国交断絶して同年四月動員令を受けて鳥取連隊へ入隊した。そして五月中旬征途に上り大孤山付近に上陸して第四軍に加わり野津軍司令官の隷下に入り、抽厳、分水嶺、紅旗嶺勾、接間听、柝木城、遼陽、沙河、奉天、南城子等大小九回の戦に参加して、平和後凱旋したものである。

爾来十数年小学校の教員を勤めつつも軍事の方面に趣味を持ち、色々と戦役其の他の方面に於いて調べて見た。是まで学校や青年団其の他在郷軍人分会等で実戦談をしたことが数しれぬ程である。

今やわが国は世界の3大強国の一に列し、各方面に於いて実質的にも世界をリードして我が国の名声赫赫として海外に轟き、我が国の一挙一投足は忽にして世界を動かし得るに至りしことは、彼の昨春開催せられたるロンドン軍縮会議に就いてこれを見るもよ

く立証して余りある処である、斯く我が国の国威が隆々とした海外に輝き、世界の羨望の的となりし所以のものは、其基因種々あるならんも、就中その最も主なる一は日清、北清、日露の三大戦役に於ける戦捷の結果であり、又その効果を齎らしたるは謂う迄もなく、宏大なる天佑と、祖先の加護、上は皇室の御稜威により、下は国民挙げての熱烈極まりなき後援との賜に他ならないが、就中我が忠勇無比なる幾十万の尊き鮮血の賜であることを断言して憚らない。

昨春日露戦役の二十五周年を迎えて新た轉た感慨に堪えぬものがある。余の戦友は既に五十路を越すことになった。その当時の戦役を回顧すると、まづあの惨憺たる戦場の光景が目前に浮ぶ。彼の死屍累々山をなし鮮血洋々谷に満つる光景はどうだ。この悲惨極まる戦闘に於いて戦友と戦友が手に手をとってお互いに或は励まし或は慰め合い或岩は抱き合って泣いた情景はどうだ。真に生死を共にした戦友の情愛は軍人の外には一寸味われない有難い体験である。即ち一本の煙草も一滴の水筒の水もわけ合って飲み、又赤い夕日に照らされながら友の塚穴を掘った仲である。いかで忘れること出来ようか。

彼の大戦十八ヶ月の間、厳寒酷暑の満州で風雨に曝され、硝煙弾雨に見舞われ、幾度も修羅の巷を出入りして数度の負傷を受けながら、又しても戦場に出でて奮戦した忠勇無比の凱旋兵士は、今いくら残って居るであろうか。この老兵士等は彼の戦場を思い浮かべて感慨無量であろう。

当時の軍人は無論のこと、軍人に非らざる特種の任務を受け敵地深く侵入した勇士等は何れも義と勇のためには命を惜しまなかった。

君のため、国のため、広漠たる満州平野の土と化し、護国の鬼となった犠牲者がある。斯の如く我が国民を代表して露と消えた幾多の戦病死者を思い出せば同情の涙いつも流れて来る。

陛下の万歳を叫んで戦死を遂げた戦友や、両親様是までは孝行をせなかったが、今満州の野戦病院に於いて国のために命をささげます、これで孝を尽したと思ってくださいと云ってこと切れた兵もあった。

彼らの健気なる言葉を聞いて腸を断つの思いなきものがあろうか。こうした忠義烈の

日本武士があったから予想以上の効果を得たのである。

余は昨春近村の招魂祭に参列した。忠魂碑の前に出て祭辞を述べようとしたとき掲示してある戦病死者の姓名を見れば殆んど余の戦友であった。是等の諸士と艱難を共にした当時を追懐して次のようなことを述べた。

『諸士は家も身も忘れて国家のために働いてくださった勇士許りである。君等が国民を代表して死んで下さったために我が国は一躍世界の強国になった。今枕をたかくして安眠出来るのは君等のおかげである。

戦友諸士と別れて既に二十五年、思い起せば戦場で互いに故郷を語り合い、手紙や父母妻子の写真を見せ合って身の上話をした。慰問袋を別け合ってお互いに慰め又は励まし合った。

俺が死んだら遺骨を頼むと云い交わしたこともある。子の出征している身の上を心配して神仏に祈願する親心の有難さを打明けて共に落涙したこともあった。

君等は名誉の討死、余は不思議にも生き永らえている。然しながら余はなんどき犬死

するか分からぬのだ。君等は百年経っても千年経っても御芳名は消えない。愈愈輝くのである。人は一代名は末代である。君等は喜んで国家を守って下さい』と迄は申したが、一時に胸はせき上げて来て息が詰った。かって戦場に於いて真の兄弟に勝る親しい戦友の情を思い出して、余は碑前の段上に立ったまま並居る参列者の人目をも厭わず声をあげて暫く泣いた。思えば軍歌「戦友」に

「肩を叩いて口ぐせに、どうせ命はないものよ、死んだら骨を頼むよと、言い交わしたる二人仲、思いもよらず我一人、不思議に命長らえて」と歌う如く、余も亦不思議に命長らえて無事凱旋し、遂に広大無窮の皇恩を享けつつ今日に至りしものの亡き戦友を偲べば眞に感無量に堪えない。

大戦後二十六星霜を過ぎ、世は移り時は流れたが現時の如き混濁せる世相、愛国心の希薄になりつつあるを証明するにあらざるなきやを疑わしむるものがある。

現時の如き毒瓦斯戦や空中戦乃至船水戦等の科学戦に変化して来ても、最後は日本魂で無ければならぬと堅く信ずる。余は既に五十を過ぎた老兵」である。この古今未曾有

の日露大戦に参加した軍人は漸次世を去って某実戦を物語るものも漸次稀になりつつある時に於いて此の書を公にするに当り、満州の広野に埋草となれる余の最も尊敬せる忠君無比の先輩並びに懐かしき戦友諸士の英霊を多少とも慰め得ることが出来れば望外の幸いである。素より不敏不肖の一老兵、この大業をよくすること能わざるも、余は貴き体験を通じて少しも飾らず偽らず率直にありのままを述べ以て参考に供したい。

此の書を執筆するに当って、岡山連隊区司令官本川省三大佐殿並びに陸軍歩兵少佐須藤重男先生兄弟の特別なる御指導と御援助に預りたることを茲に感謝してやまぬ次第である。

昭和六年陸軍記念日に際し

勲七等功七級　　長畑　亀太郎

従軍余話　一老兵の思い出

1、動員令の一夜

明治三十七年二月十日を以て、日露戦争の大詔は煥発（かんぱつ）せられた。

同日吾瓜生少将の指揮する艦隊は仁川に於いて敵艦ワリヤング、コレーツの二艦を撃沈した。

東郷連合艦隊司令長官は我艦隊を指揮して旅順口に猛撃している。

『我国民として之を見捨てて置かれよう』

殊に予備兵の余は骨鳴り肉躍るを覚えた。今日は何師団に動員があった。明日は何師団に動員が下るという噂があった。何時、我師団に動員令が降るであろうか。何時、赤紙の召集令状が来るであろうか、と昼は無論のこと、夜は時々召集されたような夢をみていた。

鶴首して待っても中々召集に接しない。この度の召集は、直ちに野戦軍に加わること故、戦死は覚悟のこと、家の始末をそれぞれと整理を附けて見ていた。余は当時小学校へ奉職していた。

妻は乳癌で二十日許り前から床についている。一，二の医師で治療をうけているが、未だ快方に趣かない。否益々重なるのであった、

時は四月十六日の夕方。

勝田村役場の使丁（してい）二名、提燈片手に、サモ活気の態度で、

『御免』

と入って来た。

『サア来た』

とは家内一同の声。すると使丁は

『召集令状が参りました』

と、徐（おもむ）ろに鞄から赤紙の充員召集令状を出した。余は受取に捺印して、かど送

りをした。

両親を始め妹は恍惚して、一言も交えない。すると妻は病床から、

『召集がきましたな、後入隊は何日ですか』という。

母は囲炉裏の傍らから、

『斯うなるのは覚悟の上ではあったが困ったことだ』という。

父は又側（そば）から、

『家の事は心配せずに行け、父は若やいで出来る限り働いて留守をみる』と云われる。

今更ながら親心の有りがたさに、余は思わず知らず涙を催したが、この言葉を聞いて一層我が意を強くした。

『家事万端の整理はつけている。戦いに行くのは名誉である。君には忠となり、親には孝となるのである。若し戦場で死ねば一門の誉となり、運強くて凱旋したならば、勲章を戴くこともあるかも知れない』、

言葉に力を入れて慰めて見た。

その夜は更け行くのも忘れて、種々話を交えた。床に入っても容易に眠られない。

二つになった我子のことや、病床にいる妻のことから、年老いた両親に、再び御世話をかける気の毒さ。

余と共に召集せらるる兵士は幾らあろうか、戦友の某は召集に逢うであろうか、出征したら人に笑われぬ丈の働きをして、勲章の一つ位は戴きたいものだ。もう故郷は見納めになりかも知れない。

戦場に臨んだ上は、露助の首を土産にするか、はたまた俺の首をとられるかの二つに一つの勝負だ。俺の一命は既に君国に捧げし身柄、何ぞ生還など思いもよらぬ。戦場の土と仮するは既に覚悟の筈だ。潔く行こう。そして憎むべき彼の露軍を斬りまくり打破って大和魂の本領を見せ呉れん。骨動き脈鳴り中々眠れる処ではない。

日清戦争で我が忠勇なる幾万の先輩が血を流し骨を削って克ち得たる遼東半島は、ロシヤの鷲にさらされた遺恨十年一剣を磨いた我が国民だ。いかでこの恨みを晴らさいで置くべきか、いざ行かん・・・・・・

未だ一度も踏んだことのない広漠たる満州平野の光景や、鬚面（ひげづら）のロスケの顔が次へ次へとうかんでくるのであった。

2、 今生の別宴と首途

覚悟したら偉いものです。出征するのを一日も早かれと祈るようになった。家の内外から、田畑山林に至るまで、何から何まで、わからぬことのないようにと、家族一同へ話して置き、留守中お世話になる隣家や親戚へ、挨拶に行った。召集を受けた翌日近所の老婆が来て、

『こんど露西亜と戦が出来ますそうで、お家の亀さんも出征なさいますとのこと、お気の毒な事ですな。折角家のお世話を譲られたと思う間もなくお出のこと、親衆の御心配と行かれるお方のお心を察します・・・・・』

と両眼に涙を浮かべて懇ろに云ってくれる。

こんな悲しみやら、喜びやらの挨拶が引きもきらなかった。

出征するとなれば、故郷の方々へ今生の別れと思い、一日土居中の人を招いて至極質素な酒宴を催した。

『皆様私は軍人として愈愈桧舞台に出ることになりました。幸い健康体であるから、出征の上は日本男子の本領を発揮する考えでありますから、時々なりと激励の御手紙が頂きたいのです。尚留守中は老人や子供等であるから、総て交際上に不行届きのことが有りがちでありますから、どうか、あしからず御容赦くださいまして、拙宅のたつように万端御配慮を御願い致します。今日はご多忙中、お暇を取ってすみませんなれど、之を以て或は皆様と今生のお別れになるかも知れないと思いますので、失礼を顧みずお招き申した次第であります。どうぞ私の誠心（まごころ）をお汲み取り下さいませ』と述べた。

席上、有志の一人が立って、

『君出征の暁は、大和男子の本分を発揚せられて必ず故郷のことは念慮に置かず、一意専心君国の為に奮闘せられよ、吾等は内に在って出来得る限りの援助をする。君、凱旋の時

は名誉の勲章を胸間に輝かされよ、これ偏（ひとえ）に吾等の希望して』止まざるところである』と激励された。

軍人としての本望は愈愈達せられた訳だが、之と同時に、暗涙の襟を潤すものがあった。男子涙なきに非ず、然し恋々と心を残すのではなかったなれど、父母妻子兄弟今生の見納めなるかと思えば自然と涙が湧いてきた。動員令を受けた日から、出発の際は誰一人涙は無用と云って置いた丈けあって、家内一同はよく忍んだものであった。

愈愈首途（かどで）を祝う四月二十一日は来た。東雲頃から起き出た近所の子供たちが庭前や道路を駆け廻る。

吾行を盛んにするためか、門前のアーチに数多くの国旗を吊るし、旗や幟（のぼり）を押し立てた村の人々は、早くも我家の周囲を取りまかれた。

余は午前四時に起き出て梶並川に斎戒沐浴（さいかいもくよく）して、祖先へ礼拝して暇を乞うた。而して一族の者は余を囲繞（イニョウ）して冷酒を汲み、出陣の首途を祝ってくれた。

かねて用意の軍服に着換え、必要な携行品を取り纏め、脚絆（きゃはん）に草鞋（わらじ）と云う出で立ちで待っていると、無二の親友である、福島君が、

「さあ行こう」

と数多の見送り人に送られながら、共にやって来た。

もう此時は一時も早う立ちたいばかりで、悲しみは何処へやら、喜色満面で家族一同へ、

「しっかりやってきます。何分留守中宜敷く頼みます。特に父は老齢のこと、御無理の仕事は遠慮して怪我うをせむよう用心して下さい。持病の母上は暑さ寒さに気をつけて養生して長命して下さいませ。妻や妹子供よ、さらばです」

「お国のためなり、家のために十分働いて帰って来てくれ、内の事は心配するな」と、門出の挨拶を交した。

斯様な挨拶は余のみではなく、出征する家々では殆ど同時に永別に臨んで繰返さたる言葉であろう。

並居る見送り人の万歳声裡に我家を後にした。武運長久を祈るため氏神八幡宮へ参詣し

た。

数日前迄奉職していた梶並校へ永別の心で挨拶に立寄った。校門を出て坂道を下る時、路側より、

「亀太郎や、もう行くか」

と声をかけられた。見れば手拭を被った持病の母である。

「もう行きます。お母さん見送りは、これでよして下さい」

と云ったが、この母の一言は、一時に胸にこみ上げて、両眼は潤って見えなくなった。

御親切にも石坂校長始職員児童一同は、二里余の道を見送って下さったことは今にも忘るることの出来ぬ思い出の１つである。この首途に当って遺憾なく我意を申せば、我祖先墳墓の地に二十数年の久しい間住みなれし郷里を捨てて、木や石まで知友の感のあるなつかしい土地と別れ、

恩愛深き父母に先達ち、可愛ゆい妻子を残して戦死するかと思えば如何にも堪えがたい思いがした。

然しながら百姓に生れた賤しき身分の余が、国家の干城として君国のために出発するのだと思えば益々骨鳴り肉騒ぐを覚った。「よし立派に立とう」と心にきめた。

見送りくださる人々は何れも余の軍服姿に注目している。是は皆様が余に対し今生の見納めになるかも知れぬと思って下さるのだろうと感じた。余も又最後の決別と思い、あとで未練の首途であったと思われても面目ない。そこで殊更愉快そうな顔色で、快活なる言葉を以て見送人の人々へ別れを告げた。

首途に当って、赤貧洗うが如きある予備兵は妻子を後に残しは思う存分、君国のために働けない、いやがる妻子をなきものにしたものや、又は妻を生家へ預けたり、或は暇を出したりしたものもあった。それかと思えば夫婦の中に別れの付かぬものもあって、親族や其の他の見送り人が、

「早く出発せられよ、汽車の時間におくれますよ」とせり立てても夫婦は１室に泣く許りして未練な首途をした兵もあった。

又ある後備兵は、夫婦の中を二世も三世も誓うと云って、盃を二つに割って半分宛別け

て大切にしたと云う話もあった。

3、　入隊と最後の軍旗祭

入隊の日は来た。四月二十三日午前五時、鳥取市大工町の宿に居た。入隊する兵員は道路に溢れて、兵営に向って行く。余も遅れじと支度を整えて一行に加わった。

練兵場には軍服や和服の軍人が黒山を築いて居る。さしもに広き練兵場の中央には、召集事務所がある。定刻の八時が来ると召集の係官は応召員に点呼をすると注意して、

「予備陸軍歩兵曹長何の誰、予備陸軍歩兵上等兵何の誰」と、呼名点呼をする。

「ハイ」

と、大声に答えて指定の場所へ行く。召集令状に甲と乙とがあった。余は年次の都合で乙の部に入れられ青紙を胸に付けられた。赤紙の甲は野戦隊に入り、乙は補充大隊に入るのであるとのことで非常に落胆したが仕方がない。市中の臨時民家を補充大隊として入るこ

とになった。そして市内上魚町の米屋に六名の兵と共に舎営した。食事はこの地の寺院の庭で炊事係の兵が拵えている。

「サア」練兵と言えば、ボウバナの停車場の敷地に行って、右向け、左向け、全体止まれと、各個教練を始めた。子供のあるお父さんが、ボンヤリして右向けに左向くものもあった。何分多くの兵士が練兵するのであるからさしもの練兵場も所狭く、此の敷地も彼の原野もこの川原も残らず兵士の訓練場となって了った。

兵士と面会人で市中は雑踏している。ある日五十有余の婦人が二つ位の子を背負い、

「此家に中島と云う上等兵はいませんか」

と、因幡訛りで尋ねて来た。後ろには二十前後の婦人が恥しそうに付いている。このような面会人も相当見受けた。

余は首途に当って斯く言った。余は晴れの戦場に出で花々しく戦い、決して卑怯未練の振舞はせぬと誓ったものだ。又里人からは、

君は先頭第一に出陣して天晴功名手柄してくれと希望されたのである。然るに予備兵の

ホヤホヤである余が最初の出征に遅れて補充大隊に残るとは面目ない。何日かは補充員として戦地に臨むことが出来ても、此場合、どうしても、此の侭では居れない。故郷へ出す手紙も又来る手紙にも補充大隊と書かねばならぬ、之では残念でたまらぬ。人後に立つのは遺憾である。そこで愈々意を決して野戦隊へ編入してくれと志願した。

四月二十五日午前7時、余の舎営している市街を、余の現役中世話になった河村義男大尉が兵営に向って歩行されている。これ幸いと、

「河村大尉殿」と声をかけて敬礼した。

「アー長畑か、お前は此処にいるのか」

「ハイ、年次の都合でこの補充大隊へ廻されました。中隊長殿、私は補充大隊で愚図愚図してはいられません。昨日志願して置きましたから是非あなたの中隊へ編入して戦地へつれて行ってください」

「アーそうか感心な至りである。然し只今何とも言えぬが又後程何とか通知があるであろう」と云い捨ててさっさっと行かれた。

確かに押しこたえがあった、多分編入して下さるものと自信した。すると四月二十六日早朝、幸にも野戦隊へ編入せよとの命に接した。欣喜雀躍とるものも取敢えず、他兵の羨望の的となって兵営の野戦隊へ転入した。

出征する日が切迫して、非常に多忙となった。今日は被服の検査、明日は武器の検査、何日は装具、何日は清潔検査で目が眩みそうになって来た。

訓練も忽にしてはならぬと云うので、教練に野外演習に行軍に日も是れ足らざる仕込まれようであった。

浜坂の砂山で再三再四の突撃演習を反復されて、息も絶え絶えに声も跡切れてしまうと、堀尾大隊長は声をからして、

「過日我軍の九連城追撃は実に見事なものであった。汝等はこれ位の演習に倒れるとは勇気のない者である。まだ此上に弾丸が来たらどうするか」

と怒鳴られる。志願までして来た、後備の古い吉川軍曹は銃剣の外に、自分勝手に黒鞘の日本刀を腰に横たえて分隊長を勤めているが、体力が之に伴わないのか、突撃にはいつも

列兵より二，三十間遅れてくる。中隊長に叱られても平気のものだ。

志願までして来た忠勇なる軍曹ではあるが、人並に動けないのは気の毒にも思ったが、又気力も乏しいのではないかと思われた。

この軍曹の日本刀はやがて曹長になる下準備かとも思われる。然し之は止む得ぬことであろう、彼は出征する間際、遂に野戦隊から補充大隊に廻された。

五月四日は最後の軍旗祭である。午前荘厳極まる式は挙行された。午後は練兵場に於いて盛大なる大宴会が催された。

連隊の将校下士卒は勿論、鳥取県知事、鳥取市長を始め、地方の名士が残らず列席された。

殊に市内の芸妓は総出で斡旋した。十分歓を尽したと思うと、兵士等は、かかる隊長を戴いて出征するのは無上の光栄だと、此処でも彼処でも将校を胴上げにした。中には、

「するなするな」

と逃げ回る士官もあった。

県知事、連隊長、市長等の発声で、

天皇陛下の万歳と歩兵第四十連隊の万歳を三唱された。斯くして十二分の歓を尽して解散した。

4、 死出の晴着で愈々出征

規則正しい軍隊でも出征準備には随分混雑する。各兵士は死出の晴着として、被服装具は悉皆戦用品。これを倉庫から取出されて、今日は飯盒、水筒、雑嚢の支給、、明日は背嚢背負袋、水越袋、携帯器具、携帯天幕、携帯口糧、弾薬、銃の付属品等、何から何まで綿密に一品の不足もなく支給や交換を受けている。

身体に纏う帽子、軍服、巻脚絆、靴等何れも新品で、ピカピカ光っている。軍装した若い盛りのつわもの達は如何にも男の中の男に見える。この立派な勇士達を、あたら戦場の露にするのは惜しいものだと思う事もあった。之ぞ終生忘ることの出来ない、五月十七日の朝は来た。つわもの達は黒の軍服に背嚢を背負い、装具一切を身に纏って、何れも活気

ある態度で各中隊の舎前に、漸次中隊縦隊に整列する。殆ど整頓終わると見るや、連隊長、各大隊長及び副官は馬上いかめしく闊歩せらる。仰いで進退を共に誓い奉る。

我連隊旗は旗手に捧持されて、栄庭の中央に停止する。鎌田連隊長の捧銃の号令と同時に、軍旗に対する足曳きの喇叭は嚠喨（りゅうりょう）として吹奏せられた。続いて沈痛なる語調で訓示は朗読された。

「第一中隊より前進」

之ぞ出征途上に於ける最初の号令であった。

営門を出で大道を左に曲がって、鳥取市へ向って行軍していると、カアカアと宇部山の森から烏が別れを告げる。因幡山から吹き下ろす嵐は何とのう名残を惜しむような心地がする。

出世者の行を盛んにするためと、一は出征軍人の見納めにと思って沿道の両側に集る群集は幾万あるか知れない。

兵士は整々堂々と四列縦隊で行進する。並居る学生児童は帽子や国旗を打ち振り、一般

の見送り人は之に和して、

『万歳、万歳』

の声は天地を震撼させた。見送り人の中から、

「このように勇ましく行かれても心の内はつらかろう」

と老婆の声が聞えた。かかる国民の熱誠なる万歳を受けた以上は戦死は決して厭わない。戦場に臨んだら軍人として恥しくない働きをしようと固く決心した。

鳥取市を西に抜けて町外れの、ボウバナの停車場の敷地で休憩した。

此時群集の中に田舎の老母と見ゆる、三巾前垂に草履を穿いて、孫とみゆる幼児を抱いて、乱れ髪の細君を側に、某兵士と話している。こちらでも、あちらでも、

「随分御機嫌よう、留守のことは心配あるな」「内のことを頼むぞよ」

と戦友に遠慮あり勝ちな挨拶が交されている。時間は許さない。号音一声、此処を出た。

此出発に際して、最も悲惨な事が出来た。

それは営庭に集合このかた僅か二三時間の内に三百名の患者を出したことである。

此悲惨事は朝の朝食が原因で腹痛を感じて吐瀉するのだ。最初営庭に整列中から二三の患者を出した。行く行く其数を増して停車場の敷地では、実に多数に上った。顔色蒼白となり、銃を杖につき、背嚢や弾薬盒を枕に仆るものが多い。約二里半程行軍した時、戦友の某が気分が悪いと云うので、余は命により路傍の紫雲英（げんげ）の田圃に停止して看護に努めた。

すると後続隊にいる患者が十数名も来て倒れた。傍に見送る土地の婦人が患者を見て、

「まあまあごつい、しょうしな事だ」

と云いつつ涙を浮かべている。四十余りの婦人が三服のテリアカを出して、

「之を重い患者へ上げて下さい」

と云う親切な方もあった。

患者は益々苦悶している。本隊は益々遠ざかって行く。急報に接したのか、補充大隊の将校や鳥取市の看護婦が車で飛んできた。

「随分ここにも患者が居るな、重い兵はどれか」

と云いつつ薬を与えるのであった。

余の任務は是で解けて本隊の跡を追って急いだ。漸くにして日没後屯営を距（さ）る八里余の智頭へ到着して指定の宿舎についた。

凡そ三百名に上った患者中、重きもの二百名を屯営の病院に還して手当をした挙句、三日目の晩に二三名を失った残り全部は、車を連ねて出征隊の後を追って来た。

何と云っても出征の思出ほど深いものはない。故郷から三里を距てたる大原町を通過せし時、黒山の如き群集の中に、余の奉職していた村の村長富阪次夫君を始め、石坂小学校長は職員児童一同と共に細い溝を距てて整列している。

「万歳万歳」

と連呼の中に、「長畑先生が」と呼ぶ声が聞こえた。余は列中に居るので目礼をしただけで、感謝の意を表するのみ。一言の御礼を述べることも出来なかったことを今に遺憾としている。

万歳万歳と叫ぶ国民歓呼の中に、千万無量の熱誠と、感謝のこもっていることが烈しく

余の胸を衝くのであった。

町端に差しかかると、右側には六十に近い父が、手拭を固くかぶった病母と共に我子の見納めと見送りに来て下さった。

此時親族の者も数人来てくれた。其内で最も濃い某が、

「お前は必ず我家のことを心配するな。未練を残すな。妻の病気は治ったぞ。わしは片肌ぬいで屹度家の世話をして出すよ。お前は戦場で天晴れな手柄をして家名を上げてくれ。時折りは戦場の有様を知らせてくれ、こちらからも知らせて出す。どうぞ体を大切にして壮健で大にやってくれ」

「自分は元より覚悟のこと、しっかりやって来ます。内の事は万事お頼み致します」

と挨拶したが、今一度我子の顔が見たいのと、もう一つは妻が治ったとは聞いたが、どの程度迄快方に進んだのか、今少し悉しく聞きたかった。

5、出征途上

姫路に着いたのは五月十九日の午後三時で、宿は竪町浜田宅であった。この内の老婆は至って親切で、丁度、余を我子の出征するように思って下さった。

金比羅様へ祈願して、御守を戴かせてくれられた。

「あなたが無事に帰られるまでは必ずお水を捧げます、どうぞ、あなたも金比羅様を信仰して下さい」

と云った。

二ヶ年の後凱旋の帰途、御礼を述べにその家に立寄って見たが、はたして、云ったことは違はない。老婆の信仰は大したものであった。余の出征中は毎晩お灯明をあげ何時も水を捧げて居たが、寒のために御酒すずが三つ壊れたと云うのであった。

主人は尚も言葉をついで、

如何なることか、不思議にも只の一夜宿りの長畑さんを、老婆は失礼ながら我子のように思って親しみました。母は御手紙を頂くたびに金比羅様にお供えしてお祈りしました。

そして度々あなたの事を口に致しました。と云う。

然しながら悲しいことには、その恩愛ある老婆は既に一ヶ月前のこと、他界の人となって居られた。

この親切な老婆のお顔が見たいなれど仕方がない。

余は心ばかりの菓子箱を霊前に供えて暫く念仏を唱えて供養の心もちとし、哀悼の微意を捧げて宿にかえった。祖夜浜田の主人は数多の土産を持って余を尋ねてくれた。世にはこのような親切な親子もあった。

五月二十日午前三時宿を立って、隊伍粛々停車場に行って乗車した。

市民は夜中をも厭わず、各々国旗や球灯を翻して、

「万歳万歳」

と吾等の行を盛にせられるのである。余等は天にも昇る心地がした。

兵士は整々堂々と軍歌を歌い、両側の名所旧跡を眺めつつ西進する。薪を樵る山里や、塩を焼く浜辺に至るまで、老若男女を問わず何れも線側に集って、万歳を浴びせられた。

甚だしきは農夫が水田に牛を止めて、口綱を持った手をあげて万歳と叫ぶのもあった。

思うに、彼は一生懸命で働くから、我出征兵士は傲慢無礼な露兵を撃退して、日本の名誉を世界に輝かせてくれと願うのであろう。

その熱誠なる後援ぶりに感謝しつつ5月二十一日午後広島に着いた。

5月二十八日宇品港にて唐崎丸に乗船した。船は黒煙を吐きつつ数多の群船を脱して出帆する。見送り人は海岸に黒山をなす。煙火は連発する。群集の万歳声裡に。

余等は甲板に立って、瀬戸内海の沿岸の両側を眺めつつ西航するのであった。その雄々しさ譬えるに物なし。

やがて鳥も通わぬ玄海に出る頃、余は本州の某山を顧みて、これが最後の眺望かと感ぜられた。二十数年後の今日になっても、当時を追憶して感慨無量に堪えぬ。

海に弱い余は船酔で、とうとう三日間絶食した。

然るに船に平気な戦友は、人の飯までたいらげた代わりに、酔った連中の世話をしてやらねばならなかった。

余は酔を忍んで故郷へ征途の行程や戦況を報ずる下準備に時を惜しまなかった。

6、 敵地の上陸

時は六月三日、乗船七日間の船酔に半病人になった余は、唐崎丸の甲板に漸く立って見れば、未だ陸えは中々遠い。晴天なるも波は高い。船は上下左右に動いて、気持が悪い。

すると北方から少し小さい汽船が、黒煙を吐いて、近寄ってくる。これは余等を載せて陸へ近寄るために迎えに来たのであった。乗換の命は下る。ふらふらするのを我慢して、物にすがって乗換をした。波のために、船が動揺して酔を増した。この船も暫く進んで、又止まる。これより、ハシケに乗りかえて丈余の高波を発動汽船に曳かれて、陸に近づいた。悪い事には丁度潮がひいていて、容易に上陸は出来ない。兵士は何れも、ズボンを脱いで、腰から下は丸出して、装具一切背嚢につけ、浅瀬を徒渉して、漸く南尖澳（なんせんおう）と云う土民部落へ上陸した。見れば、まっ黒い裸体の土人が弁髪で、腰に少し衣類を纏ったのみで数名歓迎するような風で立っている。不潔極まる民家の付近では、豚が

群をなして遊んでいる。なんとも云えない臭気が鼻をつく。船で疲労している上に、砂を焼くようなな日射は遠慮もなしに頭上からさして来る。戦はせなくとも、無事に帰ることは難しいと思わせる。この不潔で臭い土人の家の庭に、高粱を敷いて宿る事になった。身体は綿のように疲れている。未だ船酔でぶらぶらしている。高粱の夜具は背を突いて眠らせない。やっと夕食を済まして休んでいると、

「出発準備」

と命令が来た。背は痛くても厭わない、如何に臭くてもかまわない、一二日休ませて貰いたいと思った。然し余等は強敵を破って、大和男子の本領を発揮する大任を持っているである。これ位の疲労に屈してはならないと、勇を鼓して、

「一同集れ・・・。前へ・・・進め」

と隊伍堂々、大孤山（たいこざん）へ向って前進を始めた。

六月四日正午大孤山西方の河原に到着して見ると、土人が集合して、珍しそうに出迎えてくれる。へんな手真似で、露兵の退却と日本兵の追撃せし有様を云うのであった。之は

我兵の機嫌をとる為である。

この町は余り大きくはないが、海に面して乾燥がよい。町の北方の山には寺があって、昔、金毛九尾の狐が棲んでいたと云う岩穴を見た。二三日滞在中、巡察にでたて町の西北で土人の芝居を見た。舞台は狭いが中々高い。真赤の顔に下に垂れた支那人鬚を振りつつ、実に高い声でうなっている。足の小さい美人も出れば、老人も子供もでる。舞うのも躍るのもある。見物中の土人等は拍手しつつ大声に笑っている。戦場に臨んで芝居を見るとは珍しいことであった

7、抽　巖（しゅうがん）　の　戦

六月八日大孤山西方河原に集合。此時、堀尾大隊長の命令あり。曰く「敵は抽巖の南方、約一里の所に警戒線を張っている。我、第十師団は彼の敵に向って、今朝来戦闘を開始している。第一軍の浅田少将の混成支隊は鳳凰城方面から進んで、敵の左側を脅威して我攻撃を容易ならしめている。又情報によれば、敵騎、八百は我戦線の左へ迂回して、我軍に

突入せんと今まさに集合中である。依て当隊は此敵を逆襲する目的を以て前進する」と我等は西北を指して運動を起こした。

余等も今日は有名なるコサックの顔を始めて見るのが愉快だな、若しもコサックが襲撃して来たら銃剣揃えて大いに撃退してやろう。そうだそうだ、行け行け、敵弾が当れば死傷するのは承知だが、未だ実弾の下を潜ったことがないから、どんなに恐ろしいやら、危ないやら、苦しいやら、又如何に痛快のものやら更に不明であった。

露国は当時世界の陸軍国として自他共に許していた。殊にコサック騎兵は馬術に巧みであると聞かされている。初めてこの強敵に逢うかと思えば何となしに不安も感ぜられたが我兵は既に船酔も疲労も癒えて更に臆する風もなく勇気百倍、各々一騎当千の勢を以て行軍した。この日夕方我軍は見事に抽巌を占領したが、余等は敵の足跡も見ず、失望落胆したことであった。

8、　分水嶺の初陣と初対面のコサック兵

命令に曰く、

「敵は分水嶺にあり。各兵は背嚢を下ろして軽装になれ。大麻草履になれ。戦に必要ない品は此処え置け。出発だ」

之が初陣であった。余等の隊は縦隊となって、谷間を北へ北へと前進する。最先頭の部隊は散兵となったり、又縦隊となったりして進んでいる。時々小銃声が、パチパチしている。

余の中隊に居る某上等兵は二名の兵を率いて右側斥候となって山腹を進んでいると、如何なることか一人の露兵が谷川の底に屈んでいた。我斥候は銃を擬して飛びかかると敵は持った銃を投出し、腰から縄を取出して我斥候に渡した。そこで我斥候は、其敵を後ろ手に縛りあげたまま、中隊の前につれて来た。

よく見ると我兵の如き小兵ではない。彼の身長は我兵より遙に高い、顔は薄赤で白い。青味のある目玉で、無言のまま平気の顔で、余等を見つめている。この敵は大兵肥満の歩

兵で長靴をはいている。このような大男の敵と格闘するには中々骨の折れる事と思った。

斥候長

「中隊長殿、敵を一人捕虜にしました」

中隊長

「アー捕虜を得たか、お手柄お手柄、然し捕虜を縄にかけてはならぬ直ぐ解いてやれ」

「アーそうですか、捕虜はくくることはならぬのですか」

と云いつつ斥候の一人が縛りをといてやった。捕虜は、やれやれと云った様な態度で両腕をさすっていた。そして此の捕虜は我兵が後送した。

余等は、行々小敵を駆逐して、六月二十六日夕方大桑皮硲（だいそうひこく）へ行って露営した。この晩右の高地へ登った吾斥候兵の話に、東方の谷間には数多の軍馬が行進していたと云う。これぞ吾近衛の浅田支隊である。

翌くれば二十七日午前一時出発して、払暁漸く弟兄山へ登り、ここに初めて五六百の敵と戦闘を開始した。

この敵は弟兄山を守備して、其山裏に露営していたのである。

余等は未だ夜の明けざるに先だって、此山頂に登ったから、敵は不意を食ったのに違わない。山頂の敵歩哨は我軍の来襲を知って、敵方へ駆けたのが見えた。急報を受けた敵の露営隊は吃驚仰天して露営の夢を破ったのだ。我戦闘斥候は敵の狼狽しているのを発見して我隊へ報告した。

我尖兵長

「敵は前面の高地にあり。散れー三百米、各個に打てー」

と敵陣目がけて打込んだ。敵も我劣らじと応戦した。

姫路の山砲第一中隊は、余等の居る山上から敵の頭上を見かけて敵陣の右側を砲撃し始めた。

東方よりは浅田支隊が正面攻撃を始めている。

彼我の山上には煙火の如く敵味方の砲弾が無数に破裂して壮観を極めている。

余は秋季演習や大演習で殷々たる砲声は聞いたことはあるが、未だ実弾の発射を見たこ

とがなかった。

ドンー、リュウリュウリュウ、パチンーと曳火弾の空中に破裂する有様は恐ろしくも又壮観なものであった。彼我の山上や谷間の朝霧の間に、恰も無数の煙火が飛散するかのように見える。

敵の小銃弾は余等の頭上を掠めて飛ぶが存外当らぬ。然し始めて弾丸を受けるのであるから随分気持は悪い。我が発射している間に散弾を受けてはならぬと心配もあった。

幸に我攻撃はドシドシ進んで行く。余等の向う敵は一戦二戦と次第に西北へ逃げつつ防戦している。吾郡出身の浜田が初めて負傷して匍匐していると、鎌田連隊長は、

「第二大隊の軍医彼の傷兵を早く手当せよ」と、呼ばるる声がした。

衣川中尉は望遠鏡を両眼に当てたまま、

「中隊長殿敵は大縦隊を以て柝木城（たくぼくじょう）方向へ退却しています」

と、大声に報告する。

六月二十七日午前一〇時、全く分水嶺の半永久的築城は早くも我軍の勇敢なる攻撃により

我有に帰したのであった。此夜は河子溝（かしこう）の村の、二軒しかない小さな家に鮨詰になって寝た。翌日は迂回して敵の防御陣地を通過したが、築城の付近には敵に死骸が所々に転がっている。此処彼処の山かげから捕虜を数十名引出している。倉庫は焼けて見るかげもない。露営地は散乱して臭気は鼻につく。其夜は命により徐家屯に行きて舎営した。

分水嶺の戦闘余談

この戦に於て最初敵は随分勇敢に防戦したが、何分我正面攻撃の猛烈なりしと、敵が思いもよらぬ右側背から我銃砲弾の攻撃を受けたため止むなく退却したことであろう。

彼我射撃の最中には、敵弾飛来の物凄き音と、味方の発射する烈しき銃声とに我射手は心を奪われ、敵弾が何処に飛来しているか知れぬ。正確なる照準も出来ず、大切な弾着も見えずなる、従って沈着にして発射する事も又望めない事が知れた。二三十発も発射すると右肩を痛めるのである。然しながら余はこの時早くも、日露の戦は必ず勝つと云う自信

力が出来た。分水嶺は実に要害堅固の陣地で、半永久の築城に拠り相当の兵力を以て防戦する敵が、僅か五時間で早くも退却したのを見て、あっけなく思ったかあｒである。以後戦闘を重ねる毎に我兵の沈着は増したが、何時の戦にも我射手の行動は不十分に思われた。要するに平時兵の教育に於いて第一に沈着剛毅の養成と実弾射撃演習を種々なる地形に於いて実施する必要を大に認めた。

雷雨で一時に増水した小川の右岸に沿って紅旗嶺勾につくと、今までかかりし雲は何時の間にか晴れて、一天拭うが如き快晴となった。

先着の兵は各個自炊を始めている。

西方の村端しには外衛兵として小島上等兵が六名を率いて見張している、其内の一名が谷川の流れで、飯盒を洗っていると、谷奥より彼の名高い

コサック騎兵二十騎が、我兵の所在を知らざるものか、コトコト降りて来た。

先頭の敵と我兵は初対面で、互いに一驚。

すると敵は何か一言云いつつ後ろへ馬首を廻して退却を始めた。

急報に接した外衛兵は一同銃を執って早速山へ駆け登った。

よく見ると敵騎は、直ぐ前の谷間を徐々に登っている。

我外衛兵は、これ幸いと、敵の頭上を目掛けて弾丸のお見舞いを浴びせかけた。

不意を食った敵は、何か一声かけたと思うと同時に一同下馬した。

敵兵と乗馬は全く離れて雑木林へ駈込んだ。余はこの時飯盒自炊の最中であったが、何分急射撃が烈しいので、或は敵の来襲かも知れぬと思って、半煮の飯盒を手早く背嚢に付けて其山に駆けつけた。

敵は少々木陰に残って我塀兵へ対して射撃したが、多くは隠蔽して退却した。

その敵は死体一を残し、負傷者三名と乗馬十二頭を捕獲した。

健気にも、敵は前日の復讐をなさんとするのか、翌日午前十時、我西北方高地へ敵の歩兵凡そ百名来襲した。

「何、ちょこざいな敵の奴め、復讐とは生意気な、目に物見せてくれんぞ」

と我兵は、すばやく此の敵に向って応射を始めた。

谷を挟んで、千五百米突の距離で、約一時間、弾丸の交換をしたが少しの効果も見えない。亦我軍も二三の負傷者を出したのみであった。

如何したことか、敵は射撃を中止した。そして其高地にも敵兵が見えなくなった。

すると大隊長は我中隊の一ヶ小隊を以て、彼の敵を追撃せよと命じた。

勇敢無比の時実少尉は、第三小隊を率いて出た。今迄敵の射撃していた山へ登り行く有様は、実に雄々しくも頼もしかった。

幸いなるかな、其高地には一人の敵もいなかった。

油断大敵とはこのことであろう。

よくよく見ると山裏の山腹に百余名の敵が休憩している。

「敵は前面の山腹にあり、膝うちのかまえー、銃、三百―、狙―、撃」

と、一斉射撃を打込んだ。敵は中尉以下数十名の死体を残して敗走した。我時実小隊の功績は非常なものであった。

9、戦闘地住民支那人の悲哀

満州へ上陸以来の副食物は、最初の頃は一定のものであったから自然に厭きて来た。悪いこととは知りながら、土民の作っている茄子や瓜をチョコチョコ失敬するのであった。

我兵士等は行軍している際、路側へ一足寄って、一つの茄子や瓜を採り、小刀で中を割り山塩を挟みて握漬けとなし、舎営地に到着したら、戦友等へ分配して、何れも甘い甘いと互いに味合うのであった。中には隊長殿お上がりと一切れ差出す愛敬者もあったが、時には隊長から俺ｒにも一切呉れと云うのもあった。

金家屯の村には豚が多くいる。中條と村上が二人で四貫余りの豚を捕って来た。そして僅かの金を与えているのを上官に認められ、大きな目玉を頂戴した。既に処罰せらるるところを漸く願って赦して貰った。広島で受けた大山満州軍総司令官の御訓示は、どこへやら。又松村と云う兵は頭髪を全剃して、是又、大目玉を戴いたこともあった。

余等は菜家子（さいかし）の村落に到着して見ると、其村は実に哀れなことであった。

僅か二十軒の家は残らず荒れ果てて見るかげもない。昨日までは露軍が舎営していて今日は我軍が入り替りに一応の挨拶もなく留守中を見かけて失敬するのである。この村の惨酷極まる露軍の振舞には実に驚き入った。何れの家もとり乱されてある。甚だしきは家を倒して焚いたのもあった。余の入った家の前には大きな穴が掘ってある。元は土人が避難する際、土中に埋めた黍や粟を敵兵が掘出して居るのである。家の中にある長持は無理に蓋をあけて散々に襤褸が投出してある。庭の一隅には唐津の類が散らばっていると云う有様。ふと庭先を見れば此の家の主人らしい男が帰って来て、茫然として立っている。其支那人の顔は、まるで悲嘆にくれているのがよく見える。

我兵は家の内外を掃除している。何分多くの兵がいるから、其土人は家中に入ることも出来ず、暫くして又無言のまま何所かへ立去った。

余等は遼陽戦後「ウイジャゴウ」と云う村落に数日間舎営した。何分多くの兵士が土人の家を占領しているから、かなり足腰立つ支那人は避難して見えないが、足の不自由な老人や子供が少々残っている。余の舎営している納屋の一室に七十にもなる老婆と六歳位の

女の子と二人いる。毎日一二度は何処からか四十許りの男が、食物を持って来て与えている。家の内外には我兵士が沢山いるから、

この二人は便所へ行くのも恐ろしくって困っていた。

遼陽戦に我兵員は多く死傷して大損害を受けた。そこで続々内地から補充員として新しい兵員を迎えている。これがため我占領陣地は勿論のこと、土人の家屋も、ぎっしり詰め込んでいるのにまだ兵士が余って仕方がない。

中隊長

「彼の老婆と子供を追い出せ、そして一個分隊を其室に入れよ」

と命ぜられた。

余は可哀想とは思ったなれど我兵士には換えられない。すぐ其室へ入って見ると老婆は両手をついて挨拶らしい様子をしている。

余は知らぬ顔して

「我兵隊がこの室に入るから汝等二人は出て行け」

と云ったが言葉が通ぜぬので手真似で知らせた。すると老婆は合掌して、

「ここへ置いて下さい、許して下さい」

と云う。少女も共に両手をついて頭を下げて何かわからぬことを云って頼んでいる。同情心に脆い余は此の二人が落涙しつつ頼む有様を見て容易に追出すことも出来なかった。斯様に目もロクロク見えぬ老人と可愛らしい女児を追出すより、狭くても兵隊は辛抱したらと思って、余は中隊長の前に行き、

「中隊長殿、二人の土人に出て行けと云っても、頭を座にすり付けて泣くばかりして頼むのです」と云った。

中隊長

「何、どんなに泣いても許すことは出来ない、是非追出せ」

余は止むを得ぬと心に決めて、

「よろしい、出します」

又余は其室に行って前にも勝る顔色で、

「二人は出て行け、もう少しも置くことは出来ぬ」と云った。

然るに老婆と子供は又々両手をついて、声を上げ頻りと泣くのである。何かわからぬことを云いつつ頭を幾度も下げて頼んでいる。老婆より少女のかなしむ有様は一層烈しかった。この可憐なる二人を見て余は憐憫の涙にくれた。

然しながら長上の命令だ、是非がない。余は近寄って彼等二人の手を取って引立てた。彼等はもう叶はぬと覚悟したのか、老婆は汚れた布切を以て落つる涙を拭いながら、右手に杖をつき左手に少女の手を取って出て行った。国こそ違え同じ東洋の有色人種、殊に何一つも憎むことのない老幼二人、余は暫し後見送って、どうか行く処が彼等に解っているか、無事に家族に合すればよいがと思ったことである。

栃木城の戦闘後、一村端に到りし時、中隊本部の荷物を運ばせている一匹の驢馬が倒れた。恰も向うから五十歳位の支那人が一人やって来た。伝令卒の一人が是非と其土人を引留めて、無理やりに、いやがる男を脅したり騙したりして其荷物を三日間背負せた。そして僅かな賃金を与えて暇を出した。この男は何か用件があって旅行中をひっとらまえられ

たに相違はない。殊に三日間も家族に無断で我軍につかわれたのは心苦しかったことであろう。

三塊石山を占領して、余は其山麓へ行って見ると一人の坊主が死んでいた。

余は之を見て非常に腹がたった。

なぜならば何等の罪のない支那人の坊主を殺すとは、不都合千万である。余は我兵の行為に恨みを持った。

後になってよく聞くと、我兵が三塊石山を占領して其寺に隠れている敵を捕獲するため近寄らんとした時、寺の中から白い旗を出して頻りに左右に振っている。よく見ると敵兵にあらずして此寺の坊主であった。我兵は、坊主を捕らえて、

「こら坊主め、貴様は此所を逃げもせず、今迄露軍に荷担して居たな。それのみならず此の旗を振って我日本軍を欺くとは無礼の奴、覚悟ひろげ」

と云うや、数名の我兵が寄って集って、なぶり殺にしたと云うことである。

まさか我軍を欺く考えではあるまいが、坊主自身も降参の気分で白旗を出したのかも知

れぬ、何分可哀想なことをした。

三十七年秋より三十八年春にかけ、日露両軍は沙河（さが）を距てて対陣（冬営）した。この両軍の間に挟まった村落は実に憐れなものであった。両軍から多く夜間を利用して燃料の徴発に出て、土人の作り上げたる高粱殻は云うに及ばず、土人の家屋を取壊して殆ど全部灰にしてしまった。

此土地の住民は両軍に踏みにじられ、半年の久しき間我家に帰ることも出来ず、奉天大会戦後久方振りに我村落へ帰ったのである。さぞや、広漠たる荒野と化したる有様には如何にも悲嘆にくれたことであろう。

遼陽城及び奉天城、殊に旅順市街の如きは彼我の弾丸に大損害を受け全く兵火のため烏有に帰した所もある。支那人の人命及び家財を失ったことは実に数知れぬ程ある。この大損害を受けた支那は日露両国に対しこの損害の賠償を訴えたが得る処はなかった。

戦闘地住民の迷惑は実見者にあらざれば想像はつかない。

斯の如く支那人の悲惨なる実例を挙げれば数え切れない程ある。如何に、

弱小国の哀むべきかを痛切に感ずると同時に、我国力の充実をはかり且又国防の必要を大に鼓吹して止まぬ次第である。

10、柝木城攻撃

余等は第四軍司令官野津大将の指揮下にあって柝木城攻撃に参加した。

時は明治三十七年七月二十九日、柝木城南方一里余の北部周家堡子（しゅうかほうし）に舎営して北方の露軍と相対峙していた。すると、次の要旨の師団命令が来た。「約一師団の数は砲十六門を以て、柝木城北方高地より西方高地に亘り陣地を構成して守備するものの如し。軍は明三十日より運動を起し、明後三十一日払暁を以て前面の敵を攻撃せんとす。吾第十師団は明三十日、先ず老達子堡（ろうたつしほ）東方高地の敵を攻撃したる後、単かい子より老達子堡を経て、白草窪に亘る線を占領し、明後三十一日の攻撃を準備せんとす」と、右の命令に基きて、我隊は三十日払暁白草窪西方高地を占領する任務を持て、北部周家堡子南方畑地に集合した。

余は該地を斥候として偵察したことがあるので、選ばれて戦闘斥候となって、先頭に暗を蹴って行ったが、幸に使命の任務を全うした。此日午後六時范家堡子（はんかほうし）北方高地は戦わずして占領した。

此時四五百米前方の位置には敵砲数門を配置しあるを見る。此付近唯一の陣地である。

三角山東南方高地には幾筋とも知れぬ赤い線がある。之れぞ敵一命と頼む散兵壕であった。此壕に対しては良好の射距離を以て射撃し得るを見た。此散兵壕の背後には、歩兵約一千余の集団幕営や、其西方高地では歩兵約五千の集団幕営を眼下に敢制することが出来たのである。我砲兵一弾を以て敗散せしむること易々たるものと思えども、如何せん、日は将に暮るるのであった。

赤い夕日は、身を射るようで流汗は甚だしい。各兵は手に手に恤兵部（じゅっぺいぶ）より受けた、日本武尊が熊襲を拉ぐ絵のある扇で、遠慮もなしに仰ぐのであった。恰も山上に多くの、群蝶が戯れているように見える。「コラ敵の目標となる、止めよ」と中隊長が制せらるる。

姫路の山砲中隊長は、馬背のような山頂で余等の大隊長へ「これから山砲を此の山へ引き揚ぐるために、坂路を築かなければならぬ」と、話している。暗黒の幕は静かに下りて来た。

草を褥に山の傾斜面で宿ることとなった。午前十時山上に登って見れば、敵の露営地では各個自炊をしているのか、数多の焚火が見える。恰も夜間市街を遠望する心地がした。

「明日は彼の地を踏んで、相当面白い戦をやるのだ」と、戦友が話している。

終夜、砲工の聯合兵は、カチンカチンと音をたてていたが、東雲前には、予定の山砲を山上へ据え付けた。

出発命令は来た。余等は木柵のように並んで、ドロドロ敵の方へ向って山を下りた。

夜はまだあけやらぬ。

午前五時劈頭第一、我山砲は太平嶺高地一帯の敵壕に向って火蓋を切った。程なく敵も応射を始めた。彼我の砲弾は、すさまじき音響をたてて余等の頭上を掠めて行く。我歩兵は大に接近したが、何分にも敵は我より見上ぐる高地で半永久の築城によって防戦する。

「敵は前面の高地にあり、第一小隊右、第二小隊左、第三小隊援隊、散れー、千三百、各個に撃て」と、河村中隊長の号令一声で、猛烈に攻撃を始めた。如何なることか敵は余り撃たない。隊中に聞こえた勇猛なる、

第三小隊長時実少尉は「中隊長殿、彼の陣地には敵は少数です、自分は我小隊を率いて彼の敵に突撃しましょうか」と声をかける。

沈勇なる中隊長は「まだまだ其時機でない」と、之を制した。

刻一刻と敵弾の飛来は烈しくなって来る。一時は勝敗の程も疑われ、我死傷者も却々出来た。後方の山上の我砲兵は敵砲の猛射を浴びつつ、砲身を一人で担いで位置を転じているにが見える。又砲弾薬駄馬を引きたる輸卒は其山上を雲透きに側射を受けつつ砲弾を運ぶ有様は、実に活動写真を見るようで、其勇敢なる行動には何れも舌を巻いた。

頑強なる敵も、たまり兼ねたか動揺を見せた。我軍は我劣らじと何れも肉迫して、銃剣突撃を以て敵陣へ突進して目的の陣地を見事占領した。

然しながら敵は其北方高地に拠って砲弾を頼みに防戦している。

此日午後四時吾鳥取連隊の第十一中隊は、数倍の敵の逆襲を受け大いに奮戦格闘した。詳細は後記に尽す。

此夜は戦闘隊形の侭、山の斜面で夜を徹することになった。特記すべきは此日華氏百二十度で日射病に倒れる兵が少なくなかった。

余は夜中、ほしいの袋を開いて小さな牛缶を切り手図神掴みに食いつついた。ところが、敵は健気にも暗夜に乗じて我露営地へ、

「ウーラー」

と吶喊（とっかん）肉迫してくる。時を移さず、

「敵襲、突っ込めー」

と吾将校の声がするや、

「ウワー」

と味方の喊声があがる。

静粛の暗を切っての出来事である。余は食事をやめて、直ちに武器を執って山頂に登り

銃を構えて応戦したが、
敵は逸早く退却した。
余は元の位置に帰って見れば、食事は多くの我兵に踏みにじられて、どこへやら。
其処此処へ散乱せる敵の死体は酷暑のために腹部が腐敗して、むせぶが如き臭気は遠慮もなく鼻をつくのである。
余等は命によって、敵の死体を敵の壕へ引摺り込んで土を覆い埋葬した。
余は空腹と渇を忍んで、柴草を褥に眠っていたが、幾度も転びかけた。
翌朝は決戦を予期していたに、不思議にも払暁更に敵影を見ず。これ全く敵は暗夜に乗じて海城方面へ退却したのであった。此時、
前方及び左右の山々は旭旗のひらめくを見ると同時に万歳のどよめくを聞いた。

11、鳥取連隊第十一中隊の奮戦悪闘

此日太平嶺一帯高地を占領して、第二の敵陣と砲戦の折柄。

第十一中隊は孤立して山の窪地に叉銃して休憩している処へ、殊勝のも、数百の敵は銃剣のみの軽装となり、前方の山裏より隠蔽潜行して来て、不意に其中隊の前方高地に現れ、山上より猛烈に射撃を浴びせられたのである。

勇猛にして刀術に巧みな、藤原中隊長は、

「敵襲、前へー」

の号令と共に、真先に立上り軍刀を振翳して斜面を駆登り、銃口構えて乱射する敵中に躍り込み、縦横無尽に数人を切り倒したるも衆寡敵せず、数ヶ所の敵傷を受けて名誉の戦死を遂げた。

我郡出身の難波中尉も奮戦健闘して倒れた。この中尉の生家にも今尚本人の軍刀が保存してあるが、刃渡が滅茶苦茶になっているのを見ても、如何に中尉が奮戦されたかがわかるではないか。

二百何十名の中隊は、何れも悪戦苦闘、剣々相摩す白兵戦に巻込まれた。僅か十数名を残すのみとなった。

何分数倍の敵と格闘することとて壮烈悲惨の極みを尽した。

敵と刺違えて倒れているもの、敵の頬に噛みついて死するもあった。

重症を受けて立つことの出来ぬ兵は死体の中に潜り込んで、死を免れたものもあった。

谷間は死体を以て埋め、血は流れて川をなすと云う有様。この入乱れて修羅場の真最中

第十二中隊長長田所大尉は駈付けて必死となって応戦した。

彼我の砲兵軍は此交戦中、遠慮会釈もなく砲弾を打込んだ。

敵は悪逆非道を尽して退却を始めた。

余等はこの位置より右方の少し高い占領地から、この退却する敵を発見して大いに猛撃を加えた。この射撃中、どうも敵ではない、味方に相違はないと云うものがあったので、

「打ち方止め―」の喇叭を吹奏した。

よくよく双眼鏡で見ると、確かに列を乱して敗走する敵であった。

「打ち方始めー」以前に勝る猛烈なる追撃を加えた。

逆襲に出た強敵も殆ど倒れてしまった。吾村出身の在本軍曹は銃剣術の達人であったが、

此敵襲に当って自分の腕前を見せるはこの時と、

「何小癪なる敵の奴、覚悟ひろげー」

と、部下分隊を叱咤激励して敵中に飛び込み、銃剣を以て数名を倒したが、敵もさるもの、この軍曹を目がけて十数名一時に突込んできた。如何に勇猛なる在本軍曹も身は鉄石でない、遂に数ヶ所の重傷を受けて、天晴れ名誉の戦死を遂げたのである。

柝木城戦闘余談

余は柝木城の戦に暗を蹴って戦闘斥候となり、白草窪の高地に向い稜線を真直に我隊より先進した。何分地形はわからず暗くて道はなし、柴草の中を無理に押分けて行くと谷底に下りてしまった。之では路上斥候が我隊の後になると思い、又山を登ってみると我隊は前進しれ来ていた。先進した斥候が隊の後になったのは余の失敗であった。

太平嶺一帯の高地に築ける敵の散兵壕は、概して山の頂上から一二間、こちらへ下って掘っている。其壕に拠って防御するのはよいかも知れぬが、退却するには不利であった。

敵が退却を始めた時、其壕から這い出て山を越す際、彼は全身を現して敗走したから、兵隊はこの敵を見るや一斉に急射撃を集中したので殆ど倒れてしまった。

余は前後九回の戦に参加したが、この栃木城の戦闘ほど酷熱で困ったことはなかった。

我連隊戦闘詳報にもある通り、此日は百二十度の大熱で飲料水には欠乏し、汗は止度もなく流れて大苦痛を感じ、身を刺す日射で倒れる兵が続々あった。

幾度も汗を拭うハンカチは何時も軍袴のポケットに入れている。

余等は山の傾斜面にいることが多いから、其ハンカチろ洗う時がない。数日間も汗を絞りつつ、又してもポケットにいれるので、このハンカチは腐って臭気を帯び鼻も向けられぬことがあった。

軍服の如きも汗ダラダラで泥水から引上げたると同じ有様である。

山上に露営する時は多くの兵が一時に其地を離れることは出来ぬ。そこである兵士が戦友の水筒を取集め七八個も肩にかけ後方の谷間に降りて、流血して居ろうが、濁って居ろうが一向かまわず汲んで帰ると云う有様である。其苦痛は筆舌の及ぶ処ではない。

この柝木城の攻撃は野津第四軍司令官で、参謀長は今の上原元帥であった。

敵陣は柝木城の西方にある太平嶺一帯の高地に半永久の築城を築いて、乃ち分水嶺戦闘後一ヶ月を費やして防御の陣を固めて之を占拠していた。

最初敵の展望哨の居る処へ我軍が進んで、其高地から敵陣や敵の後方にある幕営を見たが、敵は案外平気のように見えた。

其時我軍が敵の眼中に入ったに相違はないが、早速敵弾も送らず、幕営を畳む様子もない。

敵砲陣地も見えているに一発の砲弾も見舞って来ない。

余は此夜中、山上に登って敵方を見たが、驚くなかれ、敵は悠々と数多の焚火をしている平気の態度に引替え、味方は煙草の火も見せなかった。

攻撃の最初余等は、千二三百の照尺で打込んだ、敵は存外沈着していたか容易に防戦せなかった。前日来の態度を見ると敵は中々と落着がある、油断はならぬと思わせた。

敵の歩兵は各個射撃を多くするが、時には一斉射撃をすることもあった。

交戦中敵が散兵壕の中を左右に横行したり、敵陣の後方及び山上をウロウロ少数の兵が彷徨するを見る時は、敵の退却する前兆であることも知れた。

藤原中隊が数倍の敵に逆襲されたのは実に気の毒であった。其時死残りの兵の話によると、其中隊から前の高地へ監視兵を出していたと云う。この兵は敵に狙撃されて死んでいたとも見える。

敵の第一線は占領していたが、まだ敵の歩兵は第二線にいた。それに敵の野砲は連発的に我占領地に猛威を逞しゅうしていた。まだ決して油断もならぬ時に、又銃して休憩したと云うことが失策であったと思える。

敵もさるもの、思い切って軽装で逆襲にてんじてた勇敢ぶりは実に見上げたものであった。

三十一日暗夜に乗じて我占領している陣地へ吶喊肉薄して来た敵の行動は勇敢とも見えたが、我喊声に恐れたか存外早く退却した。

この夜襲は敵の死傷者を収容するためと、又一つは敵が退却するため我日本軍の追撃を

ひるます目的とも思われた。

我攻撃部隊について云うて見ると、何れの隊も進むを知って退くを知らぬと云ってよかろう。各兵士も我劣らじと大に猛進した。

某特進少尉の如きは他隊に先んじて、是迄余りやった事のない分隊躍進を以て、甘く敵陣へ肉迫したのを見た。

広瀬中隊長は何時も他中隊より先に吶喊を揚げる人で、この柝木城の戦も遼陽の戦にも他中隊より率先して、

『突込めー』

と喊声をあげて敵陣に飛び込んだ。

余はこの広瀬大尉が少尉の時代に台湾守備に行っていたが、少尉は何時も土匪討伐に行く時には、先頭にあって如何なる山も川も野原も厭わず真直線に行軍した人であった。

此戦闘に於にて某隊長（名は遠慮する）の如きは、部下諸隊は敵の弾丸の猛撃を受くる中に勇躍突入して敵陣を見事占領しているに、自分は凹地に避難していた。

連隊副官が、

「お芽出とう」

と挨拶した。すると某隊長は顔を出して、俺はこの凹地にいると云ったのを見た。

同じ隊長でありながら、遼陽戦や沙河戦乃至奉天戦に於ける某隊長の如き剛胆の人とは雲泥の差があった。平時の教育は甘いが、戦時になるとあの通りであると力を落とした兵士もあった。

軍隊の根幹たる将校にも、今一層心胆の練磨を望んで止まぬ次第である。

12、遼陽攻撃の端緒

敵は予定の退却か、但しは日本軍に尻尾を巻いたか、各方面から引揚げて来て遼陽へ主力を固めるのである。

我満州軍は大山総司令官を総大将に、第一軍司令官黒木大将は右から、第四軍司令官野津大将は中央から、第二軍司令官奥大将は左に連なって、北へ北へと逐次遼陽城へ迫ること

になった。

時は八月二十五日、我等は鞍山站（あんざんてん）の攻撃を目前に白石寨（はくせきさい）南方部落に舎営した。翌朝情報あり、曰く、第五師団は既に該地を占領せりと。

其日は敵を追及して数里を行き追撃しつつ夜に入った。

此夜は頻りに雨が降って、露営地は全く湿潤してしまった。其上薪と飲料水に欠乏して各個自炊は不可能となった。仕方がないので、生米を噛みて飢をしのぎ、天幕の下に居るも、上下の湿りで全身ずぶ濡れとなって、天命を待つの止むなきに至った。

附馬営の我陣地前を、辮髪を垂れて笠を深く被った土人が揃いも揃って三人ながら、三尺もある長い煙管を口にして煙草を吹かせながら、近寄ってくる。

彼等は道もなき処を右往左往と見回しながら歩くのであった。

其動作が不審なので、吾歩哨は彼等を呼止た。土人は何か云いつつ手真似して東へ行こうとする。

我兵は近寄った。彼はまずい支那語で、

「チャンコロだー」

と云う。よくよく見れば、服装こそ支那人なるも、かくすことの出来ないのは赤い鬚に目玉の碧色。

この土人は笠を深くして頬りに顔を横に背ける。

我兵は大喝一声。

この馬鹿やろう」

と逸早く、ベラベラしゃべる三人を捕虜にした。健気にも彼等は、ゲオルギーとか云う勲章を貰おうと思って、密かに日本軍の情況を偵察に来たのだろう。

人種の異なる敵が、甘く我を欺かんとする、其陋劣極まる、寧ろ無謀に近い手段に一驚せずには居られなかった。

八月二十八日我等は調軍台を占領して、潘家炉（はんかろ）に進み、更に左方へ迂回して

「チャンジャトウン」に前進する際、

桜桃園東方高地の敵砲は、高粱畑に居る余等の頭上目がけて、連発的に砲弾を送った。

我兵は徐かに隠蔽して之を避けた。当夜は潘家炉北端しの河原に露営した。此夜ある兵が、

「敵襲―」

と叫んだ。一隊の兵は一同、

「スハ一大事」

と跳起き何れも銃を執ったが、敵の襲来した様子もない。こは夢を見たある兵が、無意識に叫んだものと後で知れた。

一戦闘の終末には、このような馬鹿な騒ぎが時々あった。

八月二十九日潘家炉から右方へ迂回して、遼陽南方約二里程ある「スウチウエ」に到着した。此時午後一時。

敵は早飯屯南方の高地一帯に、東西に亘る堅固な堡塁を築いて占拠している。

「クウジャツイ」北方高地には、現に、

敵兵が白シャツで工事中にあるのが、丁度手にとるように見える。

敵の広大なる陣地を見て一同驚いた。

従って其兵力は想像だも及ばぬことであった。

午後四時から我山砲隊は砲撃を加えて威力偵察を試みたが、敵は余り撃たなかった。

余等は此夜「シフイヨーズイ」西南の谷地に集合して露営した。夜間は敵方へ向って煙草を吸うことさへ禁じられた。

味方の山砲は左右の高地に砲列を布いている。

我偵察戦の結果、前面の敵は数十の野砲を有し、早飯屯西南の一帯高地にある敵陣には敵の歩兵役一個師団ならんと聞かされた。翌日の一大決戦を思いつつ、直接戦闘に不用の品は悉く此処へ置き、何れも軽装となって、暫し微睡むのであった。

此夜中戦友の山本がシャツを着換えている。山下上等兵が、

「山本、此一戦争が終わってから着替えたらよかろう」

「ハイ、そうも思えますが、上等兵殿、今夜はわたしが戦死するかも知れません。こんなきたないシャツを着ていて、若しも自分の死体を敵に見られたら、日本武士の面目にかか

はりますからそれで着替えています。

と云うのを聞いた。

余は此時、この山本の立派なる心掛けに感心した。

13、花々しき遼陽総攻撃

夜は未だ明けぬ三十日午前四時、中央隊命令として斯う伝えられた。

一、満州軍は本日遼陽の総攻撃をなす。

二、右翼第十連隊は早飯屯東南方高地の敵を攻撃する筈。

三、我支隊は右翼隊に連繋し先ず早飯屯西南高地の敵を攻撃せんとす。

四、第二第一大隊は第一線となり、第二大隊は右翼隊の左翼に、第一大隊は第二大隊の左に連なり敵を攻撃すべし。

五、砲兵は現在の陣地に在って攻撃を援助すべし。

六、第三大隊及び工兵第三中隊は予備隊となり払暁前に「シフイヨーズイ」東方谷地に

集合すべし。

右の命令に依って、余等は午前五時「スウチウエ」西方に集合して、敵の方へ向って運動を起こした。

右翼第十連隊と我隊との間に、後備連隊の一部が連なった。

東天漸く紅になりそむる頃、高地上の敵壕を展望することが出来た。

敵は依然その塹壕に占拠して、尚西北方に流るる稜線上の壕にも敵の充満せるを見る。

我砲兵は劈頭第一、東北高地の敵陣に向って弾丸を集中する。

其砲煙は敵陣を覆い、歩兵第十連隊は敵に接近して猛撃を加えている。

敵は懸命に防戦する。彼我の打出す砲煙と塵煙の中に、我兵は一糸乱れず、敵陣の高地に吶喊肉迫して剣々相摩す光景が手に取るようにに見える。

余はこの勇壮なる有様を見て固唾を呑んだ。この猛り狂うが如き我兵は、一部の敵陣を占領した。其の壮烈快絶例うるに物なく、とても筆舌の及ぶ処ではない。

他方面も又、大いに砲戦を始めて居る。

敵は既知距離を以て盛んに弾丸を送る。

敵兵が続々第一線に増加されるのが見える。我隊は一挙之を駆逐するの勢を以て、敵の歩砲弾雨を冒して猛進し、第五（岡本大尉）、第六（広瀬大尉）の両中隊先ず吶喊に移り、第一大隊及後備隊も亦之に従い、午前六時に至り遂に敵の第一線陣地へ飛込み、見事敵を潰走せしめて塹壕を占領した。

此時の一部隊は高地北麓より前進し来り、戦勢を挽回せんとして猛烈なる逆襲に出て来りしも、我勇敢なる士卒、何ぞ止まって彼の来るを待たんや。

突撃号令は、勇敢無双の広瀬中隊長により叫ばれた。

吶喊の快味忍ぶべからずして、既に此号令を待ちかねいたる其部下は勇躍銃剣を揮って吶喊した。

第一線の我諸隊は雨霰の如き銃砲弾も最早眼中になく、我中隊も既に散開の命下りし際中隊長は余に命じて曰く、

「今より弾薬補充に行け、此処まで小行李（弾薬駄馬）を誘導せよ」と。

依って余は唯一人散弾を側方に受けつつ小行李を誘致して、使命を全うすることが出来た。この誘致せし行動につきては、神の加護と母の夢の項に記することとする。

我中隊も壮烈極まる吶喊をすれば、敵は云うまでもなく白兵を交うるに至らずして散乱して、前方の樹林に逃れた。

我一線部隊は猛烈に追撃す、此時午前七時。

然るに、

敵の砲弾及小銃弾は刻々激甚となった。そは敵が第一線陣地を捨てて、本防御線に退ぞきこの堡塁から防戦するからである。

敵は仰ぎ見る高地に至強の工事を施し、之に占拠して我軍を睥睨している。

其兵力も亦我よりも優るのである。

第一線陣地は占領したが敵銃砲の猛威は益々其度を加え、我隊は全部展開して応戦するも目的を達することは出来ない。

我兵は僅かに其位置に現在する小池隙を利用して徒死を免るるの天佑を冀うのみとなっ

た。我攻撃隊の悲況益々極まった。

敵は瞬時の休みもなく我一線に向って砲火を弄し、我損害は益々甚大となった。

精鋭なる敵の野砲の猛射に我山砲は沈黙してしまった。

我山砲は余等歩兵を援護する望みも絶えて只々徒に天命を待つのみとなった。

地隙に伏せる我兵は、

「敵の第一線は見事に取ったが、第二線の敵は中々強いな、馬鹿にならぬぞ」

「そうだ益々優勢だ。次第次第に増加しているようだ」

「何分にも、第一線の敵陣に乗込んだ前後に思もよらぬ大損害を受けた」

「敵は随分手強い、決して油断はならぬ。陣地を挽回する気か、あの逆襲にやって来た、あの時の敵の勢はどうであったか、チョコチョコ小細工をやるな」

「敵の野砲は中々よくきくな、小さな我山砲で戦う事は無理だ。それに敵の砲は随分命中が甘いず。すれに連発的に五門は五発、十門は十発と打込んで来るから、我軍の損害も存外烈しい。何分小さい山砲のみで、野砲や重砲は泥濘のためにまだこないのだろう」

「どうも負けそうだぞ」

「これでも最後は勝つよ」

「其の戦死は立派であった、誰の負傷は可愛想であった」

射撃をせぬ時には、こんな話をしていた。

当夜は吾軍の士気を鼓舞するためか、将又事実か、我野砲隊は日没後我陣地に進入し得るとか、今夜中には徒歩砲兵も着する筈との報があった。

14、陛下の万歳を叫ぶ上等兵の壮烈なる最後

悲惨極まる悪戦苦闘は、日没と共に静粛に返った。

彼我の負傷者の呻き声と死体のそこここに散在するのみ。余等は命により、終夜敵前の一線陣地に散兵壕を掘った。余は此夜上官の命により、八名の兵を率いて隊包帯所へ死傷者の弾薬を受取りに行った。

此の包帯所は寺院であった。門前に行くと多くの負傷者を載せた担架が並べてある。

傷者に

「こら踏むな」

と云う兵もあれば、黙して一言も発せぬ者もある。

中には悲鳴をあげている兵もあった。

門内には軍医と看護長等が腕を捲って応急手当に懸命の努力を払っている。余は早速看護婦長に、

「彼の悲鳴をあげている兵を早く手当したら如何」

と、云うと、

「彼は人事不省で、もう駄目です」

と答えた。

この負傷兵は仮の手当をしたら、後方の野戦病院へ担架兵に依って運ばれている。

門の両側には死傷者の弾薬が山をなしている。

中庭には鮨詰のように何百とも知れぬ我兵の死体が整然と並べてある。

之を見て喫驚せずには居られなかった。この死体は一線で負傷して命の助かる見込みの者を、此庭に運んで来たのだが遂に落命した勇士達である。

八名の兵には携帯天幕で、各々弾薬を担わせ、元の我陣地へ死体の中を縫って帰る。その死体を照らす月光の物凄さ、身の毛もよだつのであった。

突然草中から、自分を呼ぶ者がある。

「誰か」

と、問えば、

「深田であります」

と、云う。

「深田上等兵か、どうしたのだ」

「わたしは今日の午前十時頃、負傷しましたが動くことが出来ませぬ」

と、苦悶の中に答えた。能く見れば腹部の貫通で出血甚だしく意外の重傷である。

「嗚呼可愛想なことをした。しっかりしろ命を助けてやる、大丈夫だ」

と、はげまして二名で担架を取寄せて、この苦しむ上等兵を載せて亦先程行った包帯所へつれて行った。

途中から頻りに水を乞うのである。重傷者に水は落命の基、色々と云っても聞きわけはない。軍医に診断を受けると、

「これは駄目だ助からぬ」

とのこと、余は之を聞いて落胆した。

「深田上等兵、水を飲んだら死ぬがよいか」と問えば、

「真でもよい水々」

と、云う。

是非がない、もう助からぬのだと思って、

末期の水として水筒を傾けて口に注ぐと、彼は少し身を起して苦悶の息を押止めて、

「天皇陛下万歳万歳」

と、叫んだままことときれた。最後の万歳はかすれて小さく実に悲壮であった。

此の兵は小柄な上等兵で、忠実勤勉で各地の戦に実によく働いた功績者である。そして上下の敬愛最も厚い模範兵でもあり、余に対しいつも生死を共に誓ったものであった。

この忠君愛国に燃ゆる上等兵の最後を見て同情の涙を絞ったのである。

余は八名の兵をつれて、弾薬を持ち帰り、中隊の全員に分配して其の任を果し、終夜工事を急いだ。

15、胆勇なる大隊長と連隊長の告別

夜通しに散兵壕を築いていると、敵の小部隊が前方からやって来た。我兵は土工具を投げて、逸早く銃にかえて敵に対したが、

敵は案外手応えもなく退却した。之は我軍が工事をしているか否やを偵察に出て来たのだろう。

我が大隊長船橋少佐は大熊副官と共に来て、隊長の曰く、

「どうも臆病風が吹いてならぬ」

と一喝せらる。

徹夜岩石交りの土を掘り、払暁前漸く膝射壕を築きあげ、滅切り減じた我兵が此の壕に入り、終日仰ぎ見る高地の敵に対して交戦するのであった。

此日午後二時船橋隊長は副官をつれ余等の壕を、右手に双眼鏡左手に軍刀を握り、悠々と平気で横行せられた。

敵弾は無数に飛んで来る。而かも何等意とせざる大隊長の胆勇にして沈着剛気なつ態度には一同大に感歎した。誰一人として舌を巻かぬ者はなかった。

此日は壕中で交戦をしつつ日没に至った。一刻千秋の思いを以て期待した我が野砲隊は朝来敵陣に向って射撃を開始したが、

精鋭なる敵砲のために忽ちにして沈黙してこれまた絶望に帰した。

右の高地の斜面には数多の味方が負傷して天幕を被ったまま、柴草の間に倒れて居るのが見える。中には少々動いている者もある。この憐れなる負傷者は、前日勇敢に敵中へ突入した名誉の死傷者である。

彼等を助けに行く者はない。これは雨霰の如き敵弾に見舞われるからである。

この我死傷者は夜に入って直ちに収容された。此夜も前夜と同じように左翼方面を遠望すると、二筋の火線が並んで見える。

殷々轟々物凄き彼我の小銃戦の真最中なるを見た。これぞ後にて知る、彼の首山堡（しゅざんほう）の戦で、有名なる軍神橋中佐戦死のときであった。

一戦闘終ると同郷から出征している軍人の安否が聞きたいものである。余は福島君を尋ねるため左翼に連なっている第六中隊へ行って、

「福島上等兵は生きているか」

と尋ねた。

「ハイ、福島は此処に居ます」

と壕に立った。

「ヤレヤレ有難い、死なずにすんだか」

と互いに手をとって喜んだことである。

福島の顔は土まぶれて、目玉だけキロキロしていた。

九月一日我が前面の敵は退却して、日の御旗が敵陣の高地に翩翻たるを見た。

鎌田連隊長は我第二大隊の名誉の戦死者を集めたる傍に立って申さるよう、

「諸士は遙々、この満州に出征して各地に転戦せられ、その功績は実に偉大なるものがある。諸士が犠牲になって呉れた為に此遼陽も占領することになった。旅順も既に陥落が迫って来た。汝等はよく国民を代表して死んでくれた。遺族は出来る限り援助するから喜んで地下に瞑してくれ。連隊長は満腔の熱涙を以て茲に告別するものである」

と述べられた。

よく見れば、連隊長の顔には将にハンカチが覆われていた。

この連隊長は敵弾雨飛の中に我壕中に立ちふさがり、大いに部下を叱咤激励された猛将であった。流石血もあり涙もある勇将かなと、居並ぶ兵士は何れも頭を垂れて感激したのであった。

よし一平卒にして連隊長殿より、かかる有難き御言葉を戴くからは、今後の戦に一層邁

進奮闘して名誉の戦死を遂ぐるか、さなくば殊勲をたてなければならぬと何れも拳を固く握ったのであった。

さもあるべき筈、部下兵士一同はこの連隊長を神様の如く尊敬していた。

16、国民の後援

我国民は三人とよれば戦争の話で持ち切った。

「今度我国は露西亜と戦をすることになりました。大きな騒動です。

「左様です。何分にも露国は世界の強国で我国と比較して見ると、国は大きし、金も多し、人間も沢山いるし、其人間の体格も大きし、兵隊の数も従って多い。それに彼の世界で有名なナポレオンの大軍を見事に敗北させたのも露軍であった。何から云っても、どうも我国は勝てそうに見えない」

「然しながら、我国の力とするのは祖先伝来の大和魂であります。之れで或は対等の戦をするかも知れぬ。どうぞ最後は勝利を得て戦勝国にならなければなりません」

などと話している。

我同胞は義は重く死は軽しと覚悟して、海に陸に、粉骨砕身、屍山血河をなす修羅の巷を出入しているのであるから、我々後に残って居る国民がどうして枕を高うして安眠する事が出来ようか。

どこまでも出征軍人の後援をして、後顧の憂のないように、家族や遺族を手助けしたり心を慰めて出さなければならぬと云うことに一致した。

動員令に応ずる兵士に対しては満腔の熱誠を以て旗や幟で盛大に見送りした。

処によれば笛や太鼓で送り出したのもあった。

当時村書記であった山本氏の直話を述べて見よう。

政府から軍事公債に応ずるようにと、それぞれ各村に割当が来た。そこで我村は又小部落に別けて募集をして見たが、中々甘くいかない。

多くの人は口を揃えて、

「我同胞は海に陸に君国のために身命を捧げているのであるから、我々国民は公債位には

応じなければならぬ」

と云っても其実余裕がなかった。

それは開戦前から相当不景気となり、到る所、節約宣伝と貯蓄奨励とがやかましく云われている際であったから、応募について日夜努力した。

余は村長を助けて脚絆に草鞋と云う服装で東奔西走した。

相当資産のあるものは難しくもなかったが、余り裕にない人にも云わねばならなかった。

もう二株不足と思う処へ、

ある一人の資産もない後家さんに出逢った。この後家さんは、

「山本さん、今日は何の御用でございますか」と尋ねた。

「今日は戦争の費用に当る軍事公債を募集に参りました」

「軍事公債とは如何なるものですか」

「軍事公債は政府の軍用金にするため吾々がお上へ納める金で、一株五拾円であります。ここでは唯五円の証拠金を積んで置き、後々に残りを出金すればよいのです」

「妾は男の子はなし、この場合国家に尽すことは出来ませぬから、この公債にでも応じて御奉公の心持に致しましょうか」

「それは何より結構、有りがたい。もう二株不足で困っている処です。貴女の心掛けに感謝致します」

と別れた。

是非何月何日迄に郡役所へ持参せよとのこと故、夜もろくろく眠らず、ある家はは数回も出入りして漸く取り纏め、五里の道を徒歩で走って、まだ寝間に居る流卿郡書記の手へ渡した。

このような公債応募が数回あった。何れも公債の振込みには上からは期日を定めて喧しく、村民からは容易に出金せず、板挟みとなって愈々困らせられたが、村民の至誠により遂に予定の応募に達したことを今に嬉しく思っている。

余は軍人に非らざるも、自村在郷軍人会長として、出来る限りの世話をすることにした。

何分我村は貧弱のため基金はなし、出征軍人の家族救護金の寄付金募集につきても亦一

方ならぬ苦心をした。

軍人の家族にして貧困のものは勿論、しからざるものも出来得る限りの家業の手伝をすると云うことになった。

さあ、今日は武夫君の内の田植えだ。

何日は軍平君の田草取り、何日勇士君の稲刈りだ。

と云うと、土居中の人は総出で手伝いをすると云う有様。

軍人の家族にして貧困者には、それぞれ救護金を与えて廻った。ある家族へこの金を与えたら非常なる笑顔を浮べて、

「あー有りがたい事です。是で正月餅が搗けます、五人の子供が待っています」

と感涙に咽んだのを見た。

各軍人の家族へは出来る限り度々訪問して慰安を与えた。

出征兵士には一人も漏れなく慰問状を出すことにした。我村の如き小村でも百名に近い出征者のこと故、最初は成るべく丁寧にと云う考えで、毛筆で手紙を認めたが容易に書け

ない。そこで複写紙によったり、最後に活版にした。余は手紙を書くのに相当頭を使った。幸いに少々上手になった気がした。

余は亦、新聞を出征軍人へ寄贈することにした。何分多くの兵士のこととて、今日の新聞は誰、明日の分は誰、明後日は誰と順番を定めて郵送した。

出征軍人へ慰問袋を寄贈するから、之に応じて下さいと愛国婦人会から申して来た。

この慰問袋は出征軍人を慰めるに最上のものとて直ちに之に応じた。

家によれば母が一袋出すと云えば、娘も一袋出しますと云うものもあった。予定以上の慰問袋は出来上がった。婦女子の同情も亦格別のものであった。

千人縫は弾除になるとて、出征軍人の家族や親族が三四尺の白布を持って、家々や学校其他多数の集会の場所へ持参して、

「之は弾除けにする千人縫ですから、皆さんすみませぬが一針づつ縫ってください」

と頼んで縫って貰った。この布には弾除に意味あると云う。

四字を書き込み、そして出征軍人へ送り届けて来た。戦場に馳駆する兵士は大抵この千

人縫を御神符と同様にして肌身を離さなかった。

余も亦この千人縫をうけたもので、今尚大切に保存している。

人力の及ばぬところは、

神仏のお加護に依るより仕方がない。と国民は申合せたように決心した。

我軍大勝利、出征兵士健全、武運長久、大願成就等の祈願をこめ、各戸順番に日参幟を押立って氏神へ参拝した。或は百社参拝に出かけたり、大護摩を焚いたりした。

我国は到る処、

神社、仏閣。各宗教、宗派に至るまで身命を賭して日夜の別なく、鐘を打ち太鼓を鳴らして皇軍の大勝利を祈願した。従って善男善女も日夜参拝に引きもきらなかった。

17、神の加護と母の夢

凱旋して吾家に帰れば母は云う。「お前は戦地に於て何か不思議なことはなかったか」と申される。「それは何日頃のことでありますか」と聞くと、母は、「お前が出征した後は氏

神八幡神社へ如何に雨が降る夜も風の吹く夜も欠かさず、母一人毎夜丑の刻参りを三百日連続しました。一生懸命は恐しいもの、まあよく聞いてくれ、女一人夜間隣家へ行くのも気持ちが悪い、そして淋しいものである。丑の時には草木もめぬると申します。ある夜は八幡様の鳩が突然ぐうぐうと云ったこともあり、森蔭に垂れ髪の婦人に出逢ったり、風に灯火を消されたり、風雨に傘を捕られたり、暗夜に匍匐して帰ったこともあった。難儀にあう毎に神様の吾心をおためし遊ばすのであると重い、其度毎に勇気を増した。我子の武運を祈るため、我身は狼に食われても人に殺されてもかまはない、死した我子の身代りになるのであると固く決心して信仰した。

或夜の夢に、烏帽子とちはやの神様が現れました。勿体ない事には斯様なことを申されました。「盆から大戦が出来るが亀太郎は今度は怪我をするぞ」と申されました。わたしはびっくりして「一人の男の子を失ってはなりませぬ、どうぞ助けて下さい。如何なる大願もいといませぬと合掌してひれ伏した。「汝の信心はよくとどいている助けてつかはす。明日から八幡宮へ十人揃って一週間はだし参りをせよさすれば無事に帰らせてやる」と云い

終って神様は消えてしまった。其翌日から親族や近隣の人が数十人も揃って十日お参り下さったのである」とのこと「自分はどうにも心に感じたことはございません」と申したなれど、盆から戦が始まるとのことであるから余の実戦日記と暦を対照して見ると遼陽の大戦であったことが知れた。「嗚呼そうだ」と思い当たって膝を打った。

それは遼陽の戦で、八月三十日の午前八時頃早飯屯西南高地の敵の第一線を占領して本陣に猛撃する直前、二百数十名居る中に中隊長より「弾薬補充に行け、小行李（弾薬駄馬）を誘導せよ」との命を受けた。只一人側背から敵弾を受けつつ後方の窪地へ駈下りた。見れば十名許りの兵がいる。行きなり余は「何をしているのか」と聞けば、「ハイ負傷者でありますわたしは弾薬補充に来ています」と二三の兵が答えた。余は大声で「足腰立つものは皆起てこれから約百米の距離を取ってこの広い高粱畑を押別けて小行李を見出し、第一線の我陣へ案内するのである」と命じだ。自分は一直線に七八尺の高粱を縫って行くと広い豆畑へ出た。見れば我が第十師団長川村中将閣下は数名の幕僚をひきいて軍議を凝していられる。自分は『伝令』と云った儘傍を通ると副官の一人が『何か』と問われた、

「ハイ第一線の我軍は弾薬欠乏であります。わたくしは小行李の誘導に行きます」と云ったが、これを聞かれた川村氏団長閣下は見向きもせられなかった。又高粱を押別けて行くと幸いにも十字路に出た。

吾隊の小行李の駄馬がいる。「小行李長殿」と、大喝一声すれば、『何か』と石田小行李長は立上った。「我第一線は弾薬を射尽して突撃するより仕方がない小行李前へー」とやった。「よし承知」と云った石田軍曹は「小行李前へー」輸卒は一斉に口綱をとって余の後に続いた。すると敵は駄馬の続くを見たか斜左方から砲弾が飛んでくる。

可愛いそうに二頭の馬は負傷して倒れた。余は先頭にあって呼吸も切れ切れにも目的の地に誘致して其場に昏倒した。第一線より来り待受けいた兵士等は一弾も余さず持去った。余は大任を全うして元の我中隊のいた処へ行くと我隊は一名もいない。只彼我の死体と負傷者の呻吟するのを見るのみ。「第八中隊は」ときけば傷者の云う、「この上の高地で敵と悪戦苦闘して多くの死傷者を出し残りの兵士は徒死を免るため敵の本陣前の地隙へ突進した」との事である。此時自分の居た分隊の兵は多くは死傷していたのであった。すると間

もなく我が初田小隊長は右腕に砲弾の打撲傷を受けて包帯のまま帰り来らる。余は我中隊に行く事を申したら、小隊長の云うよう、「今一人前の高地を越したら数多の敵の狙撃を受ける、必ず死傷する」と止められた。幸に危機を脱し使命を全うしたので、我軍に大なる利益を与えたと云う殊勲の項目に入り金鵄を拝受した。是全く神明の御加護と感謝すると同時に母の慈愛の有りがたさにと何とも云えぬ勿体なさが今も尚胸一ぱいに迫るのである。

18、遼陽占領と痛快極まる入城

九月一日敵は第一線陣地を捨てて遼陽城外付近に退却し防戦している。この夜「ユーヂャゴー」の村端に露営することになった。久方振りに飯盒で各個自炊をするので我分隊にいる角と云う兵は、余の飯盒を以て其部落へ行き飯を焚いて来てくれた。其夜は珍らしい米飯に舌鼓を打ちつつ食し、翌朝再び朝食をするために蓋を取った。よく見れば不思議にも飯は赤色を帯びている。余は思わず「これは紅柄飯だな」と云ってはたと蓋をしめた。然し如何せん承知せぬものは空腹である。赤泥飯でも赤飯でも何でもよい食わなければな

らぬと箸を取ってぺろりとたいらげた。角に聞くと、村中の小池の水でたいたと云う。後で調べて見ると、其池は幾年経っても水の換らぬ溜池で、水はキラキラ光って濁っていて全く金気水であった。

敵は遼陽に退いて堅固の陣地に依って極力防戦している。我軍は東西南三方より敵に迫って苦闘をしている。中にも第二十連隊の如きは大尉が連隊の指揮を取り上等兵が中隊の指揮をとると云う有様であった、今夜一時を期して遼陽城へ突入するとの事もあったが中止となった。我大隊は此戦に死傷が多かったから砲兵援護の任に廻された。一里余の高地から遼陽を遠望すれば城中には塔の高く聳ゆるのが見える。此付近へ輪我砲弾が破裂していて煙火の連発を見るようである。敵弾も遠慮なしに飛んでくる。城外付近では、どんどんぱちぱちと天地を轟かせる激戦は続いている。九月二日三日となれば停車場付近には濛々と煙が上がって天を焦がしている。其壮観は実に譬える物なき有様であった。之は退却する前兆で敵が多くの軍需品を焼却するのである。四日早朝我軍は城外の敵に向って遮二無二銃剣を打振って吶喊して明方遼陽を占領したのであった。余等は南門から入城し

たが、城外の平地は彼我の悪戦せし処で戦死者の散乱が甚だしい。恰も田圃に否束を刈捨てたように黒外套を着た我兵が多くは敵の方へ頭を向けて転っている。平気の顔もあれば、黒焦のようになっているもの、軍服が張りさくように全身はれふさがっているのもあった。其惨憺たる光景は二度と目の当てられぬ事であった。之を見て同情の涙にくれつつ隊伍堂々四列縦隊を以て入城すると後備歩兵第四十連隊と行き逢う。其隊にいる同郷の安東軍曹は「第八中隊か長畑君は生きているか」と問う声が前方でする。誰かが「無事だ」と云っている。安東君と行違う咄嗟の間に「ヤア無事か、互に死ないで結構、誰は戦死した、誰は負傷した、又逢おう、死ななかったら」と行違うのであった。

遼陽城内の各戸の支那人は今朝瞬時の間に露国の国旗を日の丸の旗に取替て軒端に樹っている。旭旗ばんばんたる光景は実に痛快なものであった。各兵士はそれぞれ別けて支那人の店へ舎営することになった。主人を始め子供まで店の一隅に押寄せて舎営した。この内にいる六十余りの老母は腰に、十七歳位の娘は右足に小銃弾の負傷をしている。之は彼我交戦中弾丸が三間余の城壁を越へ城内の市街へ飛び込んだものである。誠に支那人に

とっては不慮の災難で気の毒なことである。この二人の婦人は助けを求むるので、我兵は親切に包帯をしてやったり薬を飲ませたりした。中には正露丸を与えていたものもあった。此遼陽市街のみにても支那人の死傷二千名以上とのことであった。翌日早飯屯に向って出発の際、和田一等卒は大きな南京を背嚢につけて行軍したのが人目を引いた。

19、沙河の大合戦

十月以来連隊は瀾泥舗（らんでいほ）付近で守備していた。敵は十里河以北に位置して若干部隊を五里台子付近に出没せしめている。我連隊は旅団長の命により七日から敵情偵察のために五里台子及び烟台（いんだい）に派遣せられた。余は三日間歯痛を忍んで戦闘に従事した。如何に身辺に弾丸が飛来しても歯痛は頭を離れなかった。九日午後は一層痛みを感じ軍医に乞うて白玉の薬を一個貰って呑んだが、いつの間にか土人の家に熟睡した。坂本曹長は「長畑君目をさませ、今内命が来た、ここを引揚げて後方へさがるのだ」と、この一言に目覚めて見れば歯痛はなおったが頭はぼんやりしている。之は確かにモル

ヒネを呑まされたのであった。戦地には歯科医がなかったので、私のように歯痛で苦労した者も相当あった。若し熟睡中敵襲にあったら或は捕虜にされたかも知れない。三日間数倍の敵を相手に交戦したが得る処もなかった。要するに大挙南下の敵を釣出に出たのであった。九日午後は敵の大縦隊続々南進して来た。敵砲弾は益々頭上をかすめる。敵の大部隊は既に五里台子の北端市に現れたはや煙台に来たとの報を耳にしながら、敵に背中を見せつつ気持ち悪くも軍命令によって午後十時全く本防御線に引上げて後命を待つことになった。

敵は各方面共不利の戦闘を交えて、士気大に沮喪して来た。殊に旅順に守備するステッセル将軍は孤立して防戦している。そこでニコラス皇帝はクロパトキンに厳命して曰く、「日本軍へ対して勝利を得る丈の兵力は与えてある。然るに各地の戦に於て常に退却するは何事ぞ、今より全軍を率いて日本軍を攻撃せよ」と云うのであった。露軍総司令官クロパトキン大将は止むなく部下に令して曰く「我露軍は是迄防御の位置にありしも之より攻勢に転ぜんとす。日本軍は実に勇敢で一度に占領出来ざれば数回も攻撃を繰返して占領す

る。又一度占領した上は如何に兵力を減じても死守しても動かぬのが常であるから我露軍は一度占領した地は如何なることがあっても退却すな。若し退却するものがあれば軍刀の錆にせよ」と云う。随分きびしい命令を発したとのことであった。我軍からは敵情偵察に勉めている。各方面に出たる間諜の言によれば一旦遼陽より退却した敵は渾河（こんが）を渡りて続々南進して来ると云う。敵兵二万は昨日より渾河を渡って南下している。四ヶ師団の敵は撫順付近より渾河の左岸に移ったと。板橋付近には歩兵一旅団騎兵一連隊は防御工事をなしつつあると。また柳堀溝（りゅうくつこう）より鉄道線路に沿いて一万の歩騎砲の連合軍が南進しつつある云う。何れも攻勢に転じて南下するとの情報に接したのであった。

珍しくも是迄専守防衛であった敵は、大挙南進攻撃し来るので、

我大山満州軍総司令官はこの敵に対して迎撃すると云う、最も痛快極まる命令は十一日午前六時に出たが、我連隊は他連隊に先んじて烟台及五里台子付近にて戦闘したため師団の予備隊となった。

我満州軍の第一軍は右に、第四軍は中央に、第二軍は左に連りて一斉に攻撃することになった。我連隊は十日間瀾泥舗より東台、要堡付近で戦闘を交えずしていた。此夜は呂方寺で村落露営した。十一日も各方面は砲煙弾雨に包まれ攻撃は毫も進捗せぬ。

20、三塊石山夜襲の壮挙

夜襲の規定

一、各連隊は二線の隊形をとり第一線に二大隊他の大遂は中隊の横隊を併列す。

二、服装は外套、（夏衣を着すべからず）を着し左腕に白布を纏うべし。

三、運動発起の時刻は本夜一時師団司令部所在高地に炬火を揚ぐるを合図とす。

四、運動発起の線は歩兵第三十九連隊の占領線とす。

五、射撃は第一線の外凡て之を避くべし又要すれば号音を吹奏するを得。

是より先、革菜台の山脚にいると、師団副官は馬上勇ましく駈け来た。見れば我連隊長鎌田大佐と何か快活に話していられる。

「サア、何か面白い戦略でもあるのであろうか」と各兵はささやいだ。隊長の命令だ各中隊長集れ。すると三宅中隊長は駈歩で行かれる。間もなく帰りて曰く「各兵は軽装になって左腕に白布を巻き夜襲の準備をせよ。之迄は多く昼間の戦であったが、今夜は始めて夜襲するから、各兵を十分掌握して勇敢に一致共同すべきである」と申された。

右に依り午後十一時運動を起し、負傷者の呻き声をききつつ一列縦隊となり予定の地点に行く。平坦なるも咫尺を弁ぜぬ暗夜のこと、一軒屋を右にして広い高粱畑に二列横隊を作って叉銃し、其の後方に座して戦の時刻を待っている。

夜は次第に更けて行く。浸々と吹き来る風は身をさすようである。ワンワンと犬の遠吠がする。かすかにアゴーアゴーと驢馬のいななきが聞える。

炬火の合図を今や遅しと待っている。隣接連隊の到着が稍々遅れたため運動を起したは実に午前一時四十分であった。我中隊は併立縦隊を以て前進した。流石は訓練されたもの各兵は一言の声もなく、呼吸をこらして行進する。只高粱株や高粱の堆積しあるを踏むのでザアーザアーと音がするのは止むを得なかった。前方に大きな黒山が鼻を衝くように思

われる。僅かに十数分にして第一線の敵より一時に猛烈なる射撃を受けた。敵は我夜襲を予知したに相違はない。其敵の号令は手にとるように聞える。一斉射撃や各個射撃を交互にやっているのも聞える。敵は三塊石山及び其南麓部落や菜家屯東南高地斜面に拠って一心不乱に火力を以て我攻撃前進を防戦した。如何に暗夜と雖ども敵火を侵して猛進は容易に出来なかった。号令一下に左方へ横隊を作っている際、敵より一斉の射撃を受けた。すると一時に各兵は畑中へ伏射して、しばし敵弾を避けた。敵との距離は僅か四、五〇間あるのみで「ピュー、パチ」と飛び来る小銃弾は身辺をかすめて物凄い、後方へ落ちる弾はピューとうなる。足元より前に落ちる丸はパッ、パチと地を射るので何とも云えぬ気持ちがする。中隊長は沈着にして敵情を見とどけるまでは決して発射の号令は掛けない。我兵士は銃剣や方匙や或は湯呑で土を掘り、自分の前に土を盛り敵弾を少しでも防ぐことに務めた。敵情を知るや我中隊は一斉に発射を始めた。彼我の弾丸に雨霰の如く交換している。右の前方から突然、

「うーらー」と天地を震撼さす喊声が上る。「敵の吶喊です」とある兵が云う。すると如何

なることか二、三の兵が立ち上った。中隊長は大喝一声「馬鹿」と云った。立ち上った兵は何れも伏射に返った。後方第二戦の吾隊は敵の吶喊に対するのか、

「ワー」負けず劣らず後方で喊声を上げて突撃喇叭を連奏している。前よりは敵の吶喊、後よりは味方の喊声、実に天地をゆるがせて身の毛のよだつを覚えた。第二小隊長、和田少尉は伏射せる兵の中に只一人石に腰をかけたまま指揮している。敵弾雨飛の中に沈着なる態度は部下一同感服した。

和田一等卒は左太腿を貫通せられて「小隊長殿やられました」と云いつつ起直って包帯していると第二弾がバッと胸部を貫いた。「もうおさらばです」と云った儘、彼は壮烈なる名誉の戦死を遂げた。この和田は進むを知って退く事を知らぬ兵で、時には命令以外の働きまでしていた功績者であったので同時に上等兵に進級して勲八等白色桐葉章と功七級金鵄勲章とを賜った。其他に死傷者もあったが、暗夜に鉄砲で、損害は少ないなれど激戦は継続している。一時は何れが勝つか敗れるか実に心配でならなかった。若し敵が大挙して突入し来らば如何なる混乱を演ずるや知るべからずであった。此時第五第六中隊は三

塊石山西南斜面の敵陣に近いので先頭第一敵陣へ突入して敵を撃退した。岡本第五中隊長は戦死を遂げられ、代って衣川中尉は勇敢無比の士で頭部にお敵弾を受けたがびくともせず真っ先に敵中に躍り込み部下を励まして縦横無尽に切り込んだ。其際の事を部下に聞くと衣川中尉殿は実に剛胆の人で頭に負傷した時、「おれは負傷したけれど何ともない、決して退かない、皆吶喊の用意をせよ」と流血するのも厭わず突入されたと云っていた。第六中隊長板井大尉も共に中隊を率いて敵中に突入した。此両中隊は三塊石山占領の第一を占めた為め野津第四軍司令官より感状を受けた名誉の中隊である。我中隊も右に連って大いに奮闘した。夜襲の最中彼我の交戦酣のこの際暗黒の中に吾伝令騎兵が来た。「将校居られますか」という。交戦の真最中で容易に返事がない。「旅団長閣下の命令です、将校居られますか」と又云う。「おいここにいるぞ」とある将校が云う。「敵情は如何ですか」「敵は益々優勢である」「はい敵は益々優勢である」と復唱して弾丸雨飛の間を又再び乗馬して後方へ走った其動作は最も敏話であった。

親友の水島上等兵はこの夜自ら進んで斥候となり部下二名と共に敵中に潜入して捜索中

数多の敵に包囲せられた。彼は一騎当千の勢を以て漸く血路を得たが再び重囲に陥り力戦奮闘せしも遂に剣折れ力尽きて倒れた。仕方なく彼は励声に叫んだ。「敵は今に攻撃して来る。水島は敵弾を受けてもう帰れません」と報告した。其声は我隊によく聞きとれたとの事である。此悲壮なる報告に依って吾隊は敵の来襲にそなえた。果たして翌朝前面の畑中に水島は胸部及腹部に数多の傷を負い名誉の戦死を遂げていた。三塊石山は既に占領しているも夜暗のこと故吾他隊はこの山に向って射撃するので、謂ゆる同士打を演ずる有様となった。そこで其山では喇叭主に命じて、君が代を吹かせた。其喇叭が敵の喇叭のように聞こえた。

天明前右にいる第三十九連隊より吶喊するから一同喊声を上げてくれと云い伝えてきた。之に和して突進して敵陣を占領した。昼間の戦は秩序整然と行うことが出来るが夜間の戦は未だなれざる為か混雑錯乱した。夜明けて見れば鼻を衝く黒山は名高い三塊石山であった。

この山は両方が高く中間に寺がある。この寺の中に三との岩が突起して並んでいる。

これを三塊石と云ったと思う。寺院の中に逃げ残った敵は、窮鼠却って猫を咬むの余勢を以て吾兵を狙撃した。其麓の村落にも残敗兵が家屋にいて容易に近寄せなかったが、我兵は火を放ちて撃滅した。この山付近にいた敵は、新来のアレキサンドル三世の名誉連隊で、死体の軍服は新しくして立派なものであった。

21、西溝山と野中中尉

我占領線は確実に維持している。敵は石廟子（せきびょうし）西北方高地及摺鉢山（後に西溝山と命名）付近の高地に赤い線を作っている。之ぞ敵にとって最も大切な散兵壕である。此山に向って我砲兵は一斉に火蓋を切った。敵も相当な砲弾を送ってくる。我連隊は猛烈に攻撃を始めた。其山頂には早くも敵兵の動揺するを見た。歩兵中尉野村寛人は真先に一小隊を提げて登って見れば、敵兵は我歩砲弾の猛射に頭を上げ得ず、小さな壕中に屈み居りしを見て中尉は「突込めー」と許りに銃剣振って敵壕に躍り込み接戦格闘して名声を上げた。他隊も亦奔登突撃して来た、午後四時全く占領した。此小隊が敵と格闘し

ている其頭上ではまだ彼我の砲弾が炸裂していた。このような勇敢なる働きは青年将校に多く見えた。

西溝山を占領して見れば其西北の窪地には数多の敵兵が潰走している。点々死傷者が転っている。又西方の紅葉山（後命名）には百名余りの敵兵が逃げ残って列んでいたが、見る間に蜘蛛の子の如く散って其山の柴中に潜り込んでしまった。余等は少々の敵位は見向きもせず、北方和僧溝方面に」追撃する際、山麓には数多の負傷兵が倒れている。中には合掌して助けを乞うものもあった。多くは荒山及五家屯方向へ退却してしまった。和僧溝付近に遅れつつ退却している敵は何れも負傷者で、正しい歩み方をしているものはない。敵ながらも可愛いそうに思って追撃射撃は中止してしまった。之れで沙河大会戦は終わりを告げた。この戦に於て我等の損害も相当あったが、敵の損害は交戦記念録に明である。随分勇敢に抵抗した強敵であったことも思われるが、兎に角日本軍の露軍に対し強きことは明瞭であると自分は信ずるのである。それは開戦以来遼陽の戦までは、多く露軍は毎戦防御にあって敗戦した。能く云うことである、攻勢に立つは強く、防御は弱いと。然るに

沙河会戦は敵から攻勢に転じたので我軍は之に対し迎撃した謂ゆる大平野の大合戦であったと思う。双方とも足留めのない野戦で斯の如き結果を見たのである。

沙河戦後余談

夜襲は初めてやるので、如何なるものかは知れなかった。甘く行けばよいが、左腕に白布を付けて、背嚢を下ろして置き軽装となった時、この背嚢を再び手にすることは出来ぬかも知れぬ。

この中には故郷から来た手紙や家族の写真がある。死んだ後で人に見られたら恥しいと思って殆ど破って了った。

次第に暗くなって戦友の顔は見えなくなった時、犬の遠吠えや驢馬の鳴き声を、かすかにきき、炬火を合図に夜襲を待つときは実際何とも云えぬ淋しい気分がした。兵士等は無言で銃を抱えている。

彼我の間に、何一つの音もせぬ。昼間の天地も崩るる有様に引替え、此の夜の静かさは

又格別に感ぜらる。

両軍は息をこらして敵情を徐かに窺う様子に受取れた。

今夜は敵中に躍り込んで敵を刺すか、又は敵に刺されて戦死する何れにか決定しているものであろう。

今夜は敵と組打つて肉弾戦を演ずるのだ。油断のならぬことだと決死の度胸を据えた。戦友も黙っているが自分と同じような考でいるように思われた。

暗夜の戦は難儀なものである。部下の掌握に非常に困った。敵弾雨飛の中にあって順序正しく散開することは出来なかった。

又兵の中には暗さに紛れて後方へ残るような、づるいやつも、たまにはあった。

敵の吶喊を聞くと、命令もないのに、伏射の兵が立ち上ったのもあったが、是は、まさか号令もないのに敵中へ飛込む都合でもなかっただろう。

確かに狼狽したに相違はなかった。尤も三ヶ月教育の兵士もあったから、かような奴が千人に一人や二人は止むを得ないが、兵士の精神訓練の足らざるを痛感した。

それかと思えば和田や水島の如き勇敢なる行動をするものも相当あった。

悪戦苦闘の後、三塊石山を占領して夜明けの頃、我隊の前方五六十米の所を我将校が横行して居ると、我中隊の一人が敵の将校とでも思ったか列中から不意に一発発射した。

すると其将校は、立ち止まって、

「なんだ、馬鹿―、よく見ろ」

と云ったが幸に命中はせなかった。斯のような周章者もあった。

衣川中尉の如き負傷しながら中隊を指揮して敵中に飛込み敵の肝玉を奪ったものや、船橋大隊長は真夜無数に飛び来る敵弾の中に而かも第一線に余等の伏射している足元を

「コラ、頭を低くせよ、コラ頭が高いぞ」

と云いつつ

悠々と横行されている。大熊副官は

「隊長殿危険です、あぶないです」

と云いつつ随行しているのを見た。

このような隊長を戴かねば軍の指揮はふるはぬものだ。

西溝山の敵を撃退して、其山麓の窪地に追撃して見ると、数知れぬ敵の負傷者が転がっている。

其内の負傷者は呻くもあり、合掌して我軍に助けを乞うのもある。中には負傷の手当をしてくれと頼むもあった。何れも殺されてはならぬと云う気分がよく見えた。

我砲弾のために頭を取られて胴のみ残っているもの、片手を奪われているもの、頭部の負傷で顔面真赤になっているもの、足の負傷でゴソゴソ匐っているものもあった。

歩行の叶わぬ七八名の負傷者が円陣となって互いに負傷の手当を仕合っていた。

翌日余は糧食受領のため此処を通って見ると円陣の兵は何れも其儘死んでいた。

負傷者でも我軍に抵抗すれば遠慮もなくやっつけれるが、武器を投げている負傷者には銃剣を向ける気にもなれず、反って憐れなる境遇に同情して可愛想なと云う心が起きて来て包帯をしてやった事がある。

この戦後の悲嘆極まる情況を見て、

戦争には必ずまけてはならぬ。

どうしても勝たねばならぬと云うことを痛切に直感した。

交戦の真最中の損害より、敵に背中を見せる時、乃ち退却する時程損害の大なるものはない。

交戦中の死傷者は味方が処置してくれるが、退却に当って受けた軽傷者はどうにかして味方が連れて退却するが、重傷者や死者は其儘放棄してしまう。

重傷者は再び敵手に斃ることがある。然しながら赤十字条約に依って敵の傷者も助けては居たが、何分味方の負傷者の手当に手の届かざる時は、止むなく敵の負傷者を助けることが出来なかった。

是等の死者と重傷者は敵方が勝手に処置するから、退却軍に於いては敬愛する戦友の死体も全く行方不明となってしまった。

嗚呼情けないかな退却軍・・・・・

22、戦友鎌田一等卒

三塊石山夜襲の最中、鎌田は胸部を射貫かれて、はたと倒れた。戦友の山田は駆寄って引起こして見れば、鮮血淋漓で呼吸はしているも人事は不承である早速仮の包帯をしていると、鎌田は正気づいた。山田。「鎌田しっかりせよ傷は小さいぞ」と勇気をつける。鎌田は「残念なことをした、やられたか。まおる見込があるか」と尋ねる。「なおるよ、決して心配するな大丈夫だ」とは云うものの実は大切な胸の貫通で弾丸の入った穴は小さいが出た穴は中々大きい。とても助からないと思った。「鎌田死するようなことはないが、それでも遺言があれば、自分丈けに話して置いてくれ。君は妻も子供もあるのだからね」と云うと「有りがたいが遺言はない、只戦死の有様を知らせてくれ」「君遠慮することはないぞ」と重ねて云っても黙して言わない。呼吸は益々迫るようである。顔は青くなる。仁丹を与えて見ても、刻一刻と気力の衰えるのがよくわかる。我隊は前進して付近に兵はいない。前方では今激戦の真最中である。其の前方に当って、「ウワー」と我軍の吶喊の声がする。鎌田は目を開いて苦しそうに「山田己はどうなってもよいから早く行ってくれ、君

の恩は忘れはしないハヤクハヤク」と云う。山田も戦友を一時手当をしたのはよいが無断で残るは軍規の許さぬことであると思い、「それでは仕方がない行くよ大事にせよ」と別れて原隊に加わって戦った。戦闘中にも鎌田の身の上が気にかかっていた。夜明には見事に敵陣へ突撃して占領した。山田は小隊長に鎌田の負傷の有様を報告して、隊の休憩中に一度鎌田の処へ行かしてくださいと頼んだ。小隊長「早速行け鎌田を見てやれ」と許された。山田は思うに、どうぞ生きていてくれればよいがと神に念じて駈けて行った。漸く捜し当てて見れば鎌田は吐血して全身冷えてしまっている。山田は死体に取りついて、「鎌田鎌田」と四、五回呼んだが答はない。可愛想なことをした。残念なことをした。如何したら生き返るだろうかと色々思案したが仕方がない。気付も最う口に入らぬ。人工呼吸も駄目である。ポケットの時計がコチコチと動いている。是非がない早速鋏を取出して鎌田の頭髪と爪を切り、時計や財布や大切な手紙をとって、死体の処置までして吾隊に帰った。この二人の兵は珍しいよい仲で、出征途中から如何なることがあっても助け合うと契ったもの。それからは一本の煙草も寄贈された慰問袋も二人で別けあった。故郷よりの手紙は

互いに見せあって身の上話も繰返していた。若し戦死した時は必ず遺骨を頼むとまで約束したのであるから、山田の悲痛も想像以上のことであった。山田は親切丁寧に鎌田の生前に於ける出征中の働きから名誉の戦死の有様を細かに書いて、本人の遺留品と共に両親に送ったのである。之を読まれた親衆の心中や如何ばかり、この境遇を同じうした人でなければわからぬことである。

23、慰問袋

沙河戦後一村落に数多の兵と共に舎営していた或日のこと、大隊本部で慰問袋を分配するから受領に来いとの命に接した。余は数名の兵と共に大隊に行って主計から数多の慰問袋を受取ってきた。中隊長へ報告して各兵に分配したが、異郷にいて一寸先も命の計れぬ兵士には、故郷よりの音信は、何よりの楽み。殊に慰問袋ときては、最大の慰問である。

「ソラ」木村に一袋、吉田に一つ、福島に山本にと分配していると、貰った兵の云うことが面白い。自分のは岡山市何々町仲山某、わたしのは作用郡某村沢竹代、木山のは勝田郡

勝間田町、ヤア己のは中山惣兵衛、どーも山本のは娘らしい。確に美人のようだ。長田のはおじさんのようだ。然し筆跡から見れば小学児童らしい、など色々と無邪気に話している。

開いて見れば中には、封袋、巻紙、手拭、ハンカチ、歯みがき粉に楊子等の日用品が多い。中には焼米や、栗の実もある。又手紙もある。文中「君様には君国のためとは云へ、零下三十度の満州で、身命を捧げて強敵に当られる御辛酸、何にたとえん、心ばかりの慰問品呈上致します、御落手の上は御返事下さい」と云うようなことが書いてある。

兵士は何れも喜色満面、早速筆を執って礼状を認めるのであった。ある中国の某地よりの慰問袋に三宅某と云う婦人から送ったのがあった。田村と云う兵は遠慮もなしに、写真を贈って下さいと云ってやった。凡そ一ヶ月もたって三宅の写真が来た。よく見れば五十歳計りの賤しからざる婦人が袴をつけているのである。後で聞けば某女学校の先生であったとの事。甚だしいのは手紙の往復で、結婚話も持ち上がっていた。余の親族である英田郡出身の春名は、凱旋の帰途、姫路駅に停車した時、一面識もない女学校の生徒らしい

娘が車外から、「之は何中隊ですか」と尋ねる「第五中隊です」と答えると「春名さんはいられますか」と云う。春名は顔を出すと娘は「春名さんですか、終始御親切にお便り下さいましてありがとうございます。今日はあなたのお帰りであるから是非逢って来いと母が申しますから、早朝からこの駅にいましたのです。之は誠にお恥しい事ですが母からの志でありますからどうか納めて下さい」と菓子箱を出すのであった。春名は、きまりわるそうに、もじもじしている。隣にいる兵士が「春名折角のお志、有りがたく頂戴せよ」と云うと「それでは、誠にすみませんが、御厚意を無にしては相すみませぬから戴きます、どうかお母様へ宜敷申して下さい」汽笛一声新橋ならぬと云うか、汽車は西方へ走った。慰問袋については、この様な話がいくらもある。

24、対陣中の思い出

イ、垢と虱の攻撃

十月末になれば満州は寒くなって来た。我軍は粗末なりにも散兵壕は築いている。何分

多くの兵のことであるから、土人の家に入ることも出来ず、殊に第一線を守備するものは山や畑や野や川を縫って、防御の線を張るのであるから、冬営準備をせなければならぬ。満州は内地の家の構造では、とても大寒を凌ぐことは出来ぬ。そこで多くは山の斜面を利用して、冬篭りをする窖室（くうしつ）を作らなければならぬのである。其窖室は土を掘り込んで、其中に二、三坪の室を作り、二、三尺の戸口を設け、屋根は自然の斜面なりに土を覆い、小さな硝子を当てて明りを取るように作ったのである。そして一分隊宛程この窖室へ入って起臥をした。始めの頃は木炭もタドンもないので、其付近から生木を伐って来て室内で暖を取るため燻べたが、何分空気の流通はわるし、煙突はなし、終日煙に込められた。一週間は第一線の守備となり、一週間は交代して後方の土人の家に舎営するとは申しながら、多数いるので、洗濯もろくろく出来ず、入浴も容易に出来ない。下着から防寒服には虱がわいて来る。垢も数多付着するので、窖室の生活は、目を痛めた上垢と虱に攻められたことは、二十五年後の今日になっても忘れることは出来ないのである。ある兵は虱を取って手紙の中に封じて内地へ送った事があった。

ロ、彼我の土産交換

彼我の対陣の中間に、一つの小高い森があった。昼は其森へ露兵の展望哨が出る。夜間は同じ森へ味方の下士哨が出ていた。或日我下士哨は、日没頃其森へ出張して見ると、意外にも「ウイスキー」が一本置いてあった。之に露語の書面がついている。我兵は之は珍しい敵からの土産と喜び持って帰った。そして露語の通訳官に見て貰ったら、日本兵に贈ると書いてあるとのこと。そこで我が下士哨も葡萄酒を持参して同じように手紙を添えて送ったこともあった。下士哨がその森の近くに行くと、先方が引揚げて帰るのを見たこともあったと云う。何れ敵も吾兵を見送ったこともあろう。この時だけは、互いに射撃を遠慮したようであった。露兵からの手紙は、

親愛する日本兵よ、日本兵よ、と云うような文章の書きぶりであったことも今に記憶している。

対陣中我軍は、のんきに暮らしたと云うわけでもない。第一軍備の充実に汲々たるものがあった。兵員の増加、武器の供給、被服雑具の補給修繕から給養の保全等実に日も足ら

ざる多忙であった。余は之等に心を配りて之が為め脳を苦しめたことが激しかった。時には積雪を踏んで朔風の中に教練をする隊もあり、小哨や斥候や巡察に出るものもあり、燃料の徴発から糧食の運搬等に出場するものもあった。敵情偵察に志願して敵地深く侵入して有利な報告をした某将校や下士もあった。

何分寒気凛冽のために自然村落の舎営地や窖室の中に居り勝ちであって戦機の熟するのを待ったのである。

ハ、敵の看護婦

或日、我歩哨前線へ、一人の白服が、敵軍の方からやって来た。不思議なことには、平気で近寄って来る。よく見れば、彼は頭に白の帽を被り而も蟻腰で、腕には大きな赤十字を付けている。

確かに看護婦には相違はないが、まさか日本の看護婦ではあるまい。我兵士は、じっと目をつけて近寄るのを待った。我歩哨は、

「とまれ、誰か」

とやる。先方は何か云っているが少しもわからぬ。頭を傾けたり手を振ったりしている。近寄って見れば露国の看護婦である。

彼は少しも逃げも恐れもせないで立っている。我兵は、この看護婦をつれて来て、我軍の司令部へ送った。

後で通訳に聞けば、彼の看護婦は敵軍の後方で負傷者を救護していたものであって、彼は、ひそかに露軍の間を巧にぬけ来て、我軍へ来たものである。

看護婦の云うには、兄が日本軍へ捕虜となって、今は松山へ送られているから、そこへ行って看護に当らせくれと頼んだ。

之は叶わぬことであるから、其日夕方看護婦を目隠して、第一線を送り出し、もと来た方面へ送り返した。

而も女の身でありながら、命を捨てて敵軍の中を通り越して、親しい兄の看護に行くと云う其心がけには、我兵士は一同感心した。

二、[redacted]お正月の餅搗

西溝山に守備して北方の荒山や塔山の白皚々（はくがいがい）たる敵陣を眺めている。零下三十度の酷寒だ。敵も出て来る様子もない。味方も攻撃する程にもない。彼我の陣地から毎夜燃料にする高粱を採りに行くので、中間に細長く高粱の残りいるを見るのみ。

明治三十七年の暮は来た。正月餅にせよとて、一人につき餅米五合宛支給された。

或日、余は中隊長から、この木で餅搗臼を造れと命ぜられた。その木は長さが二米、周囲が二米半もある大木で舎営地の傍に転っている。自分は愈よ面食ったなれど、命令ならし到方がない。そこで兵の内にいる木挽一人と大工二人を呼んで、

「この木で餅搗臼を造れ」

と命じた。すると彼等の云うに、

「この大きな木を不完全な道具で臼に造ることは容易でありません。少し小さい木をさがして造ったら如何ですか」

と云う。余も亦尤もだと思って、一応中隊へ帰り、

「中隊長殿、彼の木は余り大き過ぎますから、最少し適当な木を見つけて造ったら如何で

しょうか」

と申上げた。すると隊長は顔色をかえて、

「何、出来ん。弱いことを云うな、やれば出来る。是非あの木で造れ」

と一喝せられた。余も又其気になった。

ヨシ、と心にきめて、元の三人を呼んだ。

「汝等は幾日かかっても厭わぬから、今からかれの木で臼を造れ。決して他の木で造ってはならぬぞ」

と、前にも優る厳然たる態度で命じた。三人は如何にも当惑そうな顔をして、

「よろしい、幾日かかっても許して下さい。屹度造り上げます」

と云いつつ携帯器具の細長い鋸と手斧を持って取りかかった。四日の後漸く搗臼と外に三本の杵を造りあげた。

ホ　餅の誤魔化し

十二月二十八日早朝から餅を搗くことになった。当時給養係である筆者が出張せなけれ

ばならぬ。各分隊より出た十五名の兵をつれて、石庸子（せきびょうし）と云う民家へ行って、餅を搗かせた。兵士の内には妙を得た搗手もあって中々甘い。少しの間に二石の餅を搗き上げた。酷寒であるから、揉んだ餅は直ぐ固くなる。午後三時、全部の餅を袋に入れて、各兵に担がせて第一線部隊に帰ることになった。帰途一人の兵が傍に来て「長畑五長殿、この兵の内には餅を誤魔化したものがあります」と告げた。余は打捨てて置こうかと思ったなれど、何れ持ったものと、持たぬものとがある。それに自分を少々馬鹿にした点も見えると思い、何知らぬ顔をして行進している十五名の兵を「全員止まれ、右向け・右」と号令掛けて停止させた。「さて皆のものは夜の明けぬ前から、この大寒に御苦労であった。然し気の毒だがこの内に、餅を黙って誤魔化しているものがある。一つ二つは、どうでもよいようではあるが、とった兵と、とらぬ兵がある。之では不公平であるし、尚自分として見逃すことは、将来のためいかぬことであるから、仕方がない、隠している兵は今ここで出せ。出さぬと身体検査をするぞ」と叱った。これには兵隊も困ったと見えて、不承不承に四、五名の兵が防寒外套のポケットから出した。隊に帰って中隊長へ餅搗の報

告をした後、余はつくづくと餅搗させた兵士の労苦を憶い、隊長に乞うて、十五名にそれぞれと特別に餅を配布した。

へ、酷寒の対陣

酷寒の対陣中、余は度々我防御陣地から、敵陣地を眺めて見たが、我が西溝山の陣地は我満州軍の中央にある第四軍の右翼で、

敵陣とは僅かに一里を距てている、広漠たる平野の中に敵陣の方には、塔山や、荒山や、万宝山が聳えて見える。

柳匠屯に胡老屯、長勝堡に沙河沿等の村落が点々散在している。之等一帯の地は銀世界となって、一幅の冬景色と見とれる。

平地の敵陣には頻りに煙が登っている。敵兵の動くのはよく見えないが、山の陣地へ登降する敵は多く荷物を担いで居るのが見える。晴れたる日は時に多くの兵が作業しているのが微かに見えた。

彼我の中間は時々銃声がドンドンと響くことや、カランカランとブリキ缶を打つような

音がすることもあった。

酷寒の対陣は実に淋しいもので、敵も味方も容易に出る様子も見えない。

ト、[redacted]尿氷と糞柱

満州の酷寒は零下三十度を降ると申す通り中々寒い。酷寒中は尿氷、糞柱の異観を呈する。脱糞すると上へ下へと重なる毎に凍って来て三尺も五尺もある、恰も棕櫚のような糞柱が出来た。其儘置けば後には尻につかえて来る。仕方がないから大きな木でその糞柱を打倒したことがある。

又土を掘って小便所を作り之に放尿すると流るるまではもたない。小便を仕終ると凍って氷となる。その上へ小便する度毎に氷の厚さが増して来る。かくして穴の尿氷は次第次第に高くなって、一週間の後には、とうとう足元より高くなる。其でもかまはず小便すると、氷山から足元へ氷となりつつ流れて来る。仕方がないから外の処へ便所を作る。

兵三名を一日間働かせて漸く三尺方形で一尺深さの小便所を作った事がある。満州の寒中に凍土を掘るのは実に岩石を砕くよりも難儀な作業である。

25、未曾有の奉天大合戦

イ、愈々死に時が来た

明治三十七年の十月から、三十八年の二月に至る酷寒の時期は、沙河を挟んで、敵と対陣しながら、窖室の中で垢と虱に攻められて起臥をした。殊に寒威凛冽で、指の落つるも厭わずに防御工事や警戒に、時には高粱とりに行って小銃弾を見舞われたこともあった。忘れもせぬ二月十八日の事であった。船橋大隊長のお話が斯う伝わった。

「近く一大合戦をせなければ敵は屈服せぬ。度胸と身体を練って戦機の熟するを待つがよい」と。

余はこの話を聞いて、斯う思った。これまでに、分水嶺、紅旗嶺勾、接間听（せっかんせき）、柝木城、遼陽、沙河等の戦には幸に無事であったが、此の度の戦は、愈よ最後だと決心して死所は向うに見える塔山と定めた。

二月二十五日の夕方伝令卒が内地よりの恋しい書面を一抱え本部から取って来た。

之を各小隊へ配布する中に余を差した手紙が二通ある。一通は隣村の梶並村長富阪次夫君の書面である。君国のため専心軍務に奮励して益々忠勤を抽んでられよ、家族は至極壮健でいられるから御安心あれと云うような、実に激励の手紙であった。

今一通は自宅よりの手紙で、無事に戦争しているか、こちらには何事もない。益々体を大切にして、忠義を尽してくれ、必ず家名を汚すなと云うような事が書いてある。これが最後の慰問状かなとも思った。この頃、

彼我の砲兵軍は、互いに威嚇砲撃を始めている。殊に我が二十八センチの巨砲をお見舞いするのは気持ちがよかった。

敵の砲弾も遠慮なしに飛んで来る。もう今度は戦死をすると思って、死後は云々、整理を頼む、これまでは幸に皆様のお蔭で無事に戦闘したが、こんどは之迄にない大戦争である。前面及左右の我軍は砲煙弾雨に包まれている。それとも生き長らえて或は無事を報ずる事があるかも知れないが、先ずこの手紙が最後だと思って大切に保存して置いて下さいと書いて、傍らにいる只友君に見せると、両手を組んで暫くしてから「えらいことを書か

れるな」と一口言った。此手紙は後方へ行く兵に頼んで内地に送った。今に記念として保存している。それを見る度に当時の感が胸一杯になる。戦友の福島軍曹は部下に向って斯う云っていた。おれが死んだら死骸はどうでもよいが、誰でもよい、自分の背嚢の中を見てくれ手紙が二通あるから、それ丈取って故郷に送って呉れと云っている。これは多分親と妻とに宛てた遺言状であろうと想像した。

三月一日より侵入運動は始まった。全線勇猛果敢に、ドンドンパチパチ、物凄くも血の雨を降らせる生地獄は始まった。身辺に飛来する弾丸は非常なものとなった。

ロ、攻撃中の雪達磨

三月二日の夜は、小東勾（しょうとうこう）で積雪中に夜を徹した。其夜のことである。降雪は烈しい、殊に前面では激戦の最中で飛来る弾丸は非常のものであった。何分数日間の疲労のために壕にもたれて敵弾を意とせず、眠りを催す折柄、激烈の銃声に目を開き見れば、あたりは全くの銀世界で、付近に兵はいない。自分の眠りいる内に他へ転じたのか

と、よくよく見れば、コハソモ如何に、伏せる兵士は雪達磨となって転がっている。茲に、「雪の進軍氷を踏んで、どこが河やら道さえ知れず」と云う昔の軍歌を思出した。其夜は敵中へ突入するとか話はあったが、別に得る処もなく、翌午前五時命により南長嶺の我陣へ帰った。「分隊長集れ」余は中隊長の許に集った。すると地図を開いて我軍の戦況を聞かされた。益々佳境に入りつつあるのが嬉しくて、其時の凍食は意外に甘かった。

ハ、暗を蹴って柳匠屯に向う

五日午前三時、警急集合を終り、暗を蹴って福知山堡塁より進んで、浦草窪（ほそうは）に入り、大谷旅団長の令下に入って予備隊となった。

第一線は右に第十連隊、左に我連隊の第三連隊が連りて、敵陣の柳匠屯に向い夜明前から我破壊砲撃と共に、吶喊又吶喊で天地も崩るる激戦中である。

余等の隊は第一線の後方にある陣地へ前進を命ぜられた。「第二小隊は右、第一小隊は左、第三小隊は予備隊・・散れ・・」と余等は息も絶々に前面の目的地へ出た。飛来する弾丸のために目を明けていることも出来かねた。散開して駈走しつつ足元を見れば、多くの小

銃弾が彼処此処に点在して光っている。実に物凄い。我兵士は演習に於ける散兵の如く銃を右手に捧げて、我遅れじと進み行くを見て勇ましくも又頼母子くもあった。

何分敵は我突入する兵に向って乱射するのであるから、其弾丸も無数である、我兵は倒るるものが多い。有松と云う兵は太腿をやられて倒れた。

「小隊長殿やられました」

「しっかりしろ」

と初田小隊長の語尾が強い。

「ついて行きます」

と銃に縋ったが起ち得なかった。木山は頭部を貫れて、

「ウン」

と云った儘倒れた。大谷は足を射られて匍いつついると、第二弾が頭部を射貫いて倒れ、同郷の小阪は頭部に重傷を受けて隊包帯所へ運ばれた。

余の中隊の初年兵で愛嬌のよい、上等兵候補者の首位を占めている瀬田が重傷を受けて

隊包帯所へ運ばれたが、とうとう落命した。之を聞いた樋口中尉は涙を流して、非常に愁嘆された。自己の教育をした兵は人並勝れて可愛ゆいことが知れた。

余はこの戦に給養係と分隊長を兼ねていた。我兵は何れも壕内に在って、交戦中なるも給養係の任務は多端であった。中隊全員の糧食から、弾薬、被服、携帯品の世話までせなければならぬ。雨飛する敵弾を冒して、左右に或は後方へ行動せなければならなかった。最も交戦酣なる其時に我三宅中隊長の傍に並んで伏姿していると、

「長畑軍曹お前は実によく働いてくれた。どうしても捨て置きはせぬよ」

と一言云われた。

之を聞いた余は、これ位の働きに、かかるお賞めを戴くのは勿体ない。不十分の余の働きが中隊長のお目に止まったかと思ったとき、余は思わず感涙が頬に伝った。

中隊長が戦死するか、余が今打たるるか一寸先はわからぬ時である。最後の時には其のような愛心が溢るるものである。

二、投糞放尿

五日より七日に至る間、僅かの散兵壕に入って、悪戦苦闘をしていると、困ったことは糞尿の始末であった。如何に生死の修羅場でも、はずむ糞尿は少しも遠慮しない。小便の時は兵と兵の間に放尿し、若し、隙もなければ、自分の足下へ放尿するのであった。

「こら少し足をひけ、己が小便するのだ」

と人目を憚らず放尿する。

それより難儀な事は大便であった。人と並んで脱糞するのは気持のよいものではない。それかと云って、壕より匍い出てやると敵弾が飛んで来る。脱糞中の戦死は名誉でもなし仕方がないから、

「こら両方の兵は少しここをあ窖けてくれ」

と云って新聞紙や其他の反古を敷いて大便をやる。傍の兵は

「こら臭いぞ」

と云う。

「臭い筈だ。森が今やっているのだ」

と例から云う。

この糞は土産物を包んだようにして、

「之を食え」

と云って敵の方へ投げ出すのであった。あとで手を洗はなければならぬ、その水はない。水筒の水は命を救う大切な水、そんな余裕はちっともない。

同じ手で銃を執り、パンをかじり、土を掘り、糞を投げると云う有様であった。

ホ、ミルクと美人の写真

壕を楯にして戦っていると、ある兵が、

「此のミルクは、牧田が給養軍曹殿へ届けてくれと云って出しました」

と余に渡すのであった。

「之は牧田の親切か、有難い」

と受取った。この牧田真一君は伯耆の大庄屋の子であったことを記憶している。余は非常にミルクが好きで、背嚢に入れていたから、

牧田はそれをしっていたので、親切に余を労うために送って来たものである。余はすぐさま剣先でミルクの上に小さな穴をあけて、暇ある毎に雑嚢から出して口に当てた。その味は今に忘れられない。

六日の晩方郵便物が壕を伝って届いて来た。其中に余に宛てた写真が一枚ある。裏には後備の安東とある。確かに同郷から出征している安東軍曹から送ったものであった。

その写真は二十歳前後の美人で、其顔つきが随分気にいった。一寸先も命のわからぬ此場合、この悪戦中に美人の訪れとは全く意外のこと、或は又、命を拾うかも知れぬと思った。若盛りの男子が二ヶ年も異性を見ないのである。何処の誰やら知れぬ美人の写真が、わけもなく唯々恋しい。

こんなことは体験者でなければ、とても想像もつくまいと思われる。

へ、柳匠屯の悪戦苦闘

敵陣地破壊の我砲は、なだ夜の明けぬ内から

「ドンー、リューリュー・・・ドン」

と野砲や重砲をうち出す。中央軍に据えつけたる二十八センチ巨砲は、

「ズドンー、ゴウゴウ・・・ドスン」

と大雷の響くが如くうなって行く。この砲の着弾の時は、幾万の小銃声も一時に中止したように思われた。

我歩兵は猛烈に突入して鉄条網を乗越えんとしたが意外に強固である。狼穿の上を飛越えんとしたが是又容易でない。然るに我兵は豪も屈することなく吶喊に吶喊を続けた。

其勇敢なる我攻勢に驚いた、柳匠屯の敵は退却を始めたが、何分敵は機関砲（現時の機関銃）数門を以て防戦するので、如何に犠牲を払っても一時に占領することは不可能であった。

敵前数十米の近きに接して苦戦を続けている、先発せし鉄条網破壊班（工兵一小隊）の所在不明であって、従って破壊口も分明せず、第十中隊の一部は銃剣を以て鉄条網を切断し敵の銃眼を穿てる墻壁下（しょうへきか）に切迫したが、是又奔登そることが出来ず、彼我爆弾戦を交える。我兵は鉄条網にかかりて死するもあり、狼穿の中に落ち込んでもが

くもあり、地隙に入って呻くもの、重傷兵は包帯する気力もなく、いたずらに、もがき苦しむのであった。

隣村の皆木彦八郎君は重傷を受けて動くことが出来ず、傷ける戦友に、

「自分は、もう駄目だから君は退却して、この有様を報告してくれ」

と云ったと聞いている。

かくして功績偉大なる皆木君は、とうとう行方不明となった。

斯の如くして我軍の攻勢は衰えたのに反して、一時退却をした敵は再び踵を転じた。

そして前にも増して益々防御を固めて居った。俄かに勢を得た敵は遮二無二と乱射乱撃に及んだ。

我軍の戦況は刻々と不利に陥って悲惨の度は愈よ加って来た。第一線は隊長以下幹部は悉く斃れて無指揮の状態となった。

敵は後方の中空に軽気球を揚げて、我軍の行動を見つめて居る。」

この軽気球には下の地より長い綱がつけてあり、露国の参謀間が乗っているとの話であ

った。

我軍には、この軽気球もなかった。彼我の交戦は漸く衰えて来た。我中隊長は特に一名の下士を選抜して敵情を監視することにした。そこで剛胆の聞こえある渡辺軍曹に命ぜたれた。渡辺は豪の中に立って、腰から上を出して敵情を見つめている。随分散弾は渡辺の身辺に飛来している。

「渡辺軍曹危いぞ」

「分隊長殿危いです」

と側から上官や、分隊の兵が心配して云う。

渡辺軍曹はびくともせぬ。

「当ったらそれまでだ、皆のもの心配するな、あら、弾が帽を擦ったぞ、そら右に落ちたぞ、こんどは前に来たな」

と云ったような塩梅で、珍しい度胸のすわった男である。

中隊長始め一同は渡辺君の剛胆に何れも感服した。

又右翼隊の兵が動揺して余等の処へ来た時、名は忘れたが一特務曹長が軍刀をぬいたまま、血眼になって追って来た。

そして大声一喝。

『汝等はなぜ動いた。誰の命令によったか、馬鹿ものめー』

と叱咤した。

我中隊長三宅大尉は、その特務曹長の行動に感じたのか、

「特務曹長は何と云うか、隊号と姓名を申せ」

「ハー、歩兵第十連隊第〇中隊、何の誰と申します」

中隊長はノートに認めた。

この特務曹長は功績偉大なりとて殊勲に列せられたと云うことである。

多くの損害を受けて幹部が少なくなって来ると、どうも隊が動揺することがある。是は多く敵前に於て悲況に陥った、其時に散兵の一人が狼狽すると、之につれられて位置を動く事がある。この戦にも斯様なことがあった。幹部たるもの一人になっても厳然として部

下を掌握すると云う非常なる意気込と、尚兵卒は一人になっても、びくともせぬと云う大決心が必要である。其当時烈しく余の感じたことであった。どうも平時に元気そうに云うものが案外戦時に小胆なものがある。是に反して平素温順なものが戦時には存外勇敢になるものがある。然し平戦両次に亘って勇壮な兵士も見受けた。但し断って置く、之は余の狭い範囲の見解かも知れぬが今に従軍者はよく云っている。

ト、火災を前に追撃前進

三月七日午前八時他隊と交代して平山堡塁に帰った。久方振りに白米飯と正宗二合づつ給せられた。一寸微酔となって窖室に足を延して、眠ったと思う間もなく、一大快報が来た。

「敵は退却の模様あり、前進準備」

と聞いた時の心地は何とも云えない嬉しさが一度にこみあげて来た。

三月八日午前三時から敵を追撃するため高地へ登って見ると、前面数箇所に大火災を起している。之は退却に際して敵の軍需品を自ら焼却するのであった。

余等は柳匠屯の敵陣に向って、彼我の死体を乗り越え踏み越えして、前進又前進した。

敵陣地は想像以上に堅固で、数多の銃眼を穿っているのを目撃して一驚した。とても、我軍の散兵壕の比ではないことがよく知れた。誠に我等の工事の不十分であったことを恥しく思った。然し我軍は云う、

「粗末な壕でよし、いつ迄も此の壕で防戦するのではない。若し敵襲に逢ったら一時は防戦して直ちに逆襲に進出するからである」

との申し分であった。

この柳匠屯を通り越して荒山に登って見れば、敵の歩兵約一個連隊は、北方半里程の平地に集団して先頭は北へ向って退却している。姫路の山砲は歩兵と共に砲馬を曳きあげて山上に登り、敵の密集隊の頭上を見かけて発砲した。

敵は蜘蛛の子を散らすようになって北へ北へと退却した。

敵の冬営陣地は意外に清潔で塵一つもない。誠に整然と掃除してある。露軍の軍規の正しさに感服した。余等は追撃の途上行く行く左右を見るに、凡そ二十丁を距てて我友軍は

宛々長蛇の匍うが如く北方へ向って動いているのが見える。

その夜は二時になって三家子に露営した。

チ、伊勢の神風

三月九日早朝より退却する敵を見失はぬよう追及して行く。午前十時より烈風大に起り塵煙高く飛揚して、濠々咫尺（しせき）を弁ぜぬと云う有様となった。

兵士の身辺に塵煙の飛びかかるため、色めもわからぬ黄粉まぶれとなった。只々目玉のキロキロと動くを見るのであった。

この追手の風塵にまくり立てられて、渾河の三流を渡った。此時は既に、解氷期となっていて所々に亀裂が出来てうた。実に危険なことであった。

ある兵は、其解氷している穴へ誤ってすべり込んだ。幸に右手の肘が氷にかかり、戦友二人が両手を取って、かけ声揃えて引上げた。随分大きな渾河を渡って其右岸の高地へ着剣突撃した。この高地には敵が相当居って、

余等が麓に散開した時には、中々弾を送ったが、山の中腹にも登り行くと、敵は我隊の猛

烈果敢の勢に恐れたか銃剣を交うる迄もなく退却した。

後に聞けば敵はこの、渾河右岸の高地一帯に拠って、我軍を食い止める計画であったと云う。

然るに気の毒なるかな、其時期は塵煙猛烈のため、とても敵は南面して目を開くことは不可能であった。

時恰も午後五時、一天拭うが如き快晴となった。

この風塵こそ伊勢の神風と申すのである。

此風塵の追手に依って我満州軍は殆どの解氷の危機一髪を利用して渾河を渡ったのである。午後六時七間房より「シャーシュンチェン」方向に敵の大縦隊伍を乱して退却しているを見た。この敵に向って、

「敵は前方の窪地を退却している。立うちの構え銃、二千米、狙―撃」

と、一斉射撃を打込んだ。

赤い夕日は地に落ちて久しきに亘るを得ざりしため、其効果は不明であった。

リ、奉天城占領

三月十日は益々敵を追及して奉天の東北方へ行動することになった。

夜はまだ明けざるに左後方に当って轟々と砲声がする。

「今日は相当の獲物があるぞ」

と話して進むと、英打堡の村端で敵と衝突した。交戦十分にして敵は退却した。

夜は明け離れた。満州の大平野は眼前に展開してきた。午前八時頃、南北に流るる高地の稜線上に第十連隊と我第四十連隊とは相並んで西方に向い警戒中、

南方の森より二騎の敵兵が現れ、続いて後より数百の歩兵が、どろどろと列も作らず北方差して出て来る。其行進する有様は、全く秩序のない敵の敗走兵である事が見える。

我軍の追撃射撃は始まった。

「前面谷間を敗走する敵、八百米、各個に撃て」

と我両連隊は、ウンと打ち込んだ。

その散乱する敵兵を以て谷間を埋めている。右往左往と駆回る敵に対して我弾丸を雨霰

の如く集中するので、

敵は我弾着で打あげる、土煙の中を遮二無二敗走する有様は、

実に敵ながら気の毒であった。

漸次敵は前方の山裏に命からがら逃げ込んだ。かくして残るは多くの死体と重傷者のみであった。

その敵の死傷者の悲惨極まる有様は到底筆にも言葉にも尽すことは出来ない。

この時も余は退却に当っての損害は、攻撃前進の時に於ける損害より大なることを大いに感じた。

どうしても敵に背中を見せてはならぬと思った。この日我満州軍は悪戦苦闘の後遂に奉天を占領したのである。

ヌ、勇敢なる敵の逆襲

我隊長は油断ならじと思ったか、

「各兵はその散兵線に直ぐ壕を掘れ」

我歩兵は一斉に携帯器具で壕を掘りかけた。未だ地面が凍っていて容易な業でない。少し土を動かしていると、前面の山裏から、

数百の敵が横隊となって少し腰を屈めながら各々銃を提げて山を登って来る。中には、将校らしいものが軍刀を振り翳して指揮をしているのが見える。

この勇敢なる敵は死物狂でやって来たのである。

「敵の逆襲、各兵は銃を執れ」

の号令一下、余等は逸早く器具を取る手を止めるや、銃口を揃えて射撃号令を待つ。

敵は地形の偵察もせず、その山へ駆け登ったものの、其山は上が平たくて射撃に不便であったと見え、少しこちらの方へ下り込み、点々並木のある処迄来て膝射のまま我隊に向って乱射乱撃した。

左側に並んでいる第十連隊は我陣地より下りて前方の山へ登りかけていた時、この逆襲に逢ったので、すぐ元の位置へ戻って交戦した。

「何、小癪な敵の奴めー」

と我兵は猛烈な射撃を加える。入江中尉の指揮する機関銃二門は、我中隊の左翼に進出して、ドンドンと射ち出す。

我後方の山には山砲が砲列を布いて、

ドンドンと続けさまに打込んだ。如何に勇敢無比の敵も、遂に居たまらずして浮足をたてた。敵は或は片足で踊りながら、或は匍いながら逃げるもの、頭を抱えて墓地の裏へ駈込むものもあり、十中八九は死傷してしまった。僅か一時間の交戦で又大勝利を博した。

此時、智頭の生まれで国岡と云う、兄は予備役、弟は現役で二人揃って、しかも同中際で出征していた。

此戦に兄弟は数間離れて大いに奮闘していたが、兄は敵弾のために胸部を貫かれて、

「ウン」

と云ったまま即死した。ある戦友が、

「国岡、兄さんが今やられたぞ」

と云うと、弟は直ぐに兄の所へ駆つけて、鮮血したたる兄の顔を見るや、さすが血を別け

たはらからもの、兄弟としてどうして他所に見て置かれよう、嗚呼気の毒や兄上と、ぐっとせきあげた弟は、

「ワーッ」

と一声あげて泣いた。すると傍にいる特務曹長が軍刀を振翳して、

「国岡、何のざまなら、ぶち切るぞー」

と一喝した。

国岡は泣くのうを止めて、元の位置へ帰ったのを見た。

ル、転覆する敵車両

遥かに見ゆる前方の高地上を、数十台の車両が多くの荷物を積んで北進するのが雲透きに見える。

之ぞ敵が軍需品を満載して北方へ退却しているのである。是を見留めた我戦利加農砲は其退却する車両に向って火蓋を切った。

其砲弾は車両縦隊の上で炸裂した。すると、其車両の列は乱れて其場に転覆するもの、

馬のみ走って車の残るもの、馬と車もろともに谷に落ちるもあり、車と馬を捨て置いて、御者のみ走るもあった。

その周章狼狽する有様は実に見物であった。余等は敵の死体を左に見つつ、車両の転覆している所へ行った。

車両から落ちている印度米袋の内容品を検べて見れば角砂糖が充満されてある。

「やあ之は砂糖だな」

と云った。すると各兵は一斉に寄ってたかって手に手に掴んで、ポケットや雑嚢に押し込んだ。

西方の谷間には何十頭とも知れぬ軍馬が林の中にいた。是は敵が退却するに当って残したものであった。其日は王家勾で村落露営した。

敵は北方へ退却したのに南方を警戒せよとの命があった。之は我軍が敵の連絡を打切って突き出たため、敵は切れ切れとなった。

クロパトキンは全軍に命令することは不可能となった。仕方がないから其切れ切れの内

から指揮者をこしらえて、其際勝手の行動を取ることになったのである。

この夜、我歩哨の前に

「チャンコロだ」

と云って来るものがある。取押えてよく見れば敵の歩兵であった。まずい支那語で我を欺くとは、あきれてものが云えない。

退路を失った敵は此処へ何百、彼処へ何千と至るところに敗残兵が出没している。

翌十一日西方村端に行くと、二三百の敵が整列している。余等の隊が其前に行くと彼等は一度に挙手の敬礼をした。見れば武器は一つも見えない。之等は皆吾軍の捕虜にしてくれと待っているのであった。

ヲ、捕虜の群と分捕品の山

三月十一日は師団の予備隊となって、終夜引き回された。二週間も連続戦闘しているのであるから、各兵士は何れも綿の如くに疲れている。止まれと云うと道であろうが、山であろうが、畑であろうが又何があろうが、一向かまわず其場に屁たばって動かない。

銃を持った侭死人の如く眠り続けると云う有様であった。

「前進」と云うと、亦ドロドロ立って、痛みの足をひきずりながら行軍して行くのであった。

余は此時、人間の耐久性を試練するのは、ここかと思った。此戦闘中実に二週間、我兵は塹壕に或は野に山に又は河原に眠り、氷や雪にまぶれ寒風に肉をさがれ、全身には防寒服に武器、器具、弾薬、雑具等実に七貫以上もある重荷を忍びたる兵士の辛酸苦痛は言語に絶すると云ってよい。

当時を思出せば身の毛がよだつ。それでも我兵等は病気も起さず余り落伍もせず戦闘した。是は全く精神の緊張によるものと思える。若し平時に於いてこのような苦痛をさせたら殆ど倒れてしまうだろう。

それから暫く後方へ行くと、道の一側に歩兵銃が整頓よく並べてある。三四丁も行くに少しの切目もない。其数は数千もあったと思う。之は捕虜のもっていた銃であった。

その前方に小山が見える。其山は全く火で包んでいる。近寄って見ると武装を解除され

た露兵が山一面にいて、今各個自炊をしているのである。其山を取巻いて我歩兵が百名余り銃剣を持って歩哨に立っている。

其捕虜は一個旅団もいると云う話であった。翌十二日は北方へ行軍して行くと前方に村落が見える。近寄って見れば村でなくて、敵の青塗の車両が満載したまま幾百とも知れぬ程置いてある。

是は皆分捕品で糧食や弾薬や衛生材料等が積んであった。

ある寺院に集めている捕虜は自ら担架を担いで露兵の負傷者を収容しているのも見受けた。

何れの捕虜を見ても六尺大の大男で、頭には逞しい黒毛のある帽子を被っている。之を見ると実に恐ろしいような気がした。吾日本兵は之に比べてみると大人に対し子供位の差がある。

露兵はノッソノッソと歩む。我兵はチョコチョコと歩むと云う有様。

此の大人が子供に降参するのであるから、見られたものではなかった。

此処彼処の山陰から、数人又十数名と逃げ残りの露兵が集って来る。

彼等は何れも武器はなく、外套や水筒又は雑嚢を持ったまま、下目だってしょんぼりしながらやって来るのであった。

ワ、牛肉隊司令官

十三日大隊から一頭の牡牛を貰い受けた。中隊長は給養係の余に其牛を殺して各兵に分配せよと命ぜられた。

然しながら自分は田舎のもので今に屠牛場を見たこともない。そこで数名の兵を呼んでこの牛を殺せと云いつけた。其内には一人として殺す元気者もいなぃ。或兵が云う、大隊長殿の馬丁がやるのですと云う。

そこで其馬丁を呼んで牛を殺してくれと頼んだ。馬丁は、いやいやながら小十字鍬の尖った方で牛の額を目かけて二つ打込んだ。

すると牛は一声あげて其場に倒れた。他の兵は刃物を持って首を落し腹を切りさき、血を踏み出して四つの足を切離し、胴と都合五つに配けた。其時、

「前進準備」

と命令が来た。仕方がないから中隊長へ報告すると、

「其肉は担いで行かせよ」

と命ぜられた。そこで銃や背嚢を他兵に持たせ、十名のあき手をこしらえ、五荷にして西方の村へ運ばせた。此時余が自称牛肉隊司令官と云うのである。ハヽヽヽ。

余は時折所々へ実戦談を試るに、この事は児童等によく笑われたことであった。凡半里を行くと、此村で露営するのだと云うから、牛肉を各分隊へ配当しかけている処へ又も出発という命令である。

虫のよい余もこの時は腹が立って仕方がない。疲労しきった兵に肉を担がせるは気の毒に思った。

余は思い切って、

「もう時間がないから各兵は勝手に分けー」

と云った。各分隊から出て来た兵は小刀其他で手に手に切取って雑嚢其他に持ち去った。

カ、古林の抜軍の奇功

我中隊の古林は補助担架卒として魚鱗堡付近に同じ担架卒のみ三十名許り集合していた、すると東方の隊から「一名の監視兵を残して、他は皆一線の方向へ来れ」と命ぜられた。然るに三十名とも同級のもので一名の残置者を命ずるものがない。そこで抽選を以てすることになった。幸か不幸か此の籤が古林へ当った。古林は決心して「よし皆のものは不用の品は此処へ置け、俺が処置してやる」他の兵は全部担架を以て出動した。残品は悉皆土人の倉庫の中へ投込んで手持無沙汰となりあたりを見回しながら、若し敵が戻って来た時はどうしたらよかろうかと心配もしていた矢先、図らずも南方の小山を雲透きに銃を担ったようなものが夥しく見える。或は敵の敗兵ではあるまいかと思った時、期せずして茲に一案が出た。「そうだ」と云って土人の家屋に飛入り長持を無理に開いて見ると、是れ幸なるか支那人の衣服があった。之は天より授かったのだ有りがたいと早速軍服の上へ着込んだ。頭には似合した帽があり、愈よ支那人になり変った。之なら大丈夫だと思って南方さして進んで行った。森の中からそっと頭を出すと、あにはからんや南方の窪地を数千

の露軍が北進して来る。心を静めてよくよく見れば中には乗馬の将校もいる。

「やあ確かに敵の大軍である」と

古林は早速途を北方へとり我軍のいる方へと駆出した。幸に近衛連隊の方へ行った。古林は「之は何隊か」と問う。歩哨は「貴様は何か」と問返さる。それは其筈支那人すっくりである。「俺は歩兵第十四連隊の兵である。今其南を敵の大部隊が前進して来ている。中隊本部はと何処か」と問い駈込んだ。其中隊には将校は皆死傷して特務曹長が中隊長代理をしている。「中隊長殿、自分は鳥取連隊の第八中隊の古林一等兵であります。只今何千とも知れぬ敵が此方へ向って帰って来ます。早く戦闘の用意をなさねば間にあいません」と云った。特務曹長「よし来た承知」と云うや、軍刀左手に「中隊は戦闘準備をせよ」と云いつつ連隊長の元へ駈付けた。依って連隊は直ちに南面して一兵を遁さじと待ち構えている。それとも知らぬ敵は列を組んで堂々と前進して来た。

「敵は南方より来る。九百米突、各個に射て」と発射した。

敵もさるもの号令一下に散開して烈しく応射した。一時は勝敗もあやぶまれる程激戦を

交えた。

何分我軍は前に廻りて、どっこい返さぬぞと両手を拡げた有様であるから、敵も肝玉を奪われたに相違はない。敵は二三時間の後土壁の中から銃を投出すものや、銃剣にハンカチを付けて振るものや、白い旗を振るものが一時に出来て来た。之は降参したと云うのである。そこで我軍は射撃を中止して敵を全部捕虜にした。古林はチャン服で武器もないから家屋の中にいて弾のあたる心配はなかった。戦が終ると古林は元隊へ帰るよう申出た。

「待て、お前にはやるものがある」

と申さる。暫くすると次の如き証明書を受けた。

証　明　書

歩兵第四十連隊第八中隊

陸軍歩兵一等卒　　古　林　新　吉

右は本日支那人に擬装して巧みに潜行し弾の敗残部隊を発見し早速当連隊へ急報せり依って我隊は数時間激戦の後数千の捕虜を得たり、古林の功績偉大なるものと認む依って

茲に証明致候也

明治三十八年三月十二日

近衛歩兵第　連隊十二中隊長代理

陸軍歩兵特務曹長　何　之　誰　印

古林は喜んで之を持って我隊に帰ったのである。この手柄は、我第四軍司令官野津大将の御耳に達し立派な感状を受けた。古林は其功のよって上等兵に進級した。そして殊勲甲となって、中隊でいに一番で功六級を拝受した。この事は、どうしても忘れることは出来ない。余は其当時、古林の証明書や感状を見て、其事実を詳しく書いて鳥取の新聞へ投稿した。凡一ヶ月もたった後、其記事に赤い丸を付けて満州へ送って来たことがある。

ヨ、御神符の身代り

奉天の合戦に同郷の安東軍曹は後備歩兵第四十連隊に分隊長として、漢城堡の戦に参加した。三月七日の夜、敵の大軍の襲撃を受け、あわや退却の止むなきに至った時、沈着剛胆の奥田中隊長は部下を叱咤激励して大に苦戦を続けていた。敵弾は雨霰の如く飛

んで来る。

一発の敵弾飛来して安東軍曹の左胸をしたたか打った。

「ヤアやられた」

と安東君は云って、胸を押えて見たが不思議にも痛みもなく、又出血するふうもない。

勇敢なる軍曹は其侭戦闘を継続した。幸に其中隊は奮戦激闘の後敵を撃退した。この中隊は他隊の来る迄数倍の敵を相手に苦戦して其位置を死守し大に大勝を博した。其他に功もあっただろうが、この奥田大尉は功四級の金鵄を受けた。

其翌日安東君は中隊長の前に行き、

「中隊長殿、自分は昨夜確かに負傷しましたが、妙なことには痛みがありません」

と報告した。中隊長は、

「それは如何にも合点がいかぬ。身体検査をして見よ」

と云う。軍曹は軍服を脱して見ると、上衣の左胸の内ポケットの処へ食指の入る位の穴がある。又背の方へは肩甲骨の下部の処へ数倍もある弾の出た穴がある。

然るに身体には少しの傷もない。

中隊長始め一同は不審に思った。それで弾の入ったポケットの中にある守袋を取出して見ると、不思議や敵弾は見事にこの守袋を射ち貫いていた。

安東君が出征した後は、両親を始め親族一同は一心に神仏へ祈願していた。

隣村である馬形の親戚に珍らしい老人の信仰者があった。この人は出征軍人のために只管武運長久を祈っていた人である。

ふと、うかんで常々崇拝している御神号の中部を御神符として安東軍曹に送ることにした。そこで自ら御神号の縁を切り中（天照皇大神宮）を小さく折込み満州へ郵送した。

安東君は有りがたいと押し戴き、この御神符を大切に自分の守袋に入れて、何時も肌守としてポケットに納めていたのである。

確かにこの御神符が身代りに立って下さったのである。お蔭によって無事凱旋した安東君は、再び敵弾三ヶ所の穴のある御神符を以前の如く表装して御神号となし、日夜拝礼している。

又貫通している軍服は中隊長より貰い受け今尚大切に保存している。

余は昨年二十五周年陸軍記念日に当り、我勝田村分会長安東佐日七中尉の招待により、村民一同の前に於いて当時の追懐談を試みた。

その時安東君の最も尊敬している前述の御神号と、弾痕のある軍服とを以て、拙ない実戦談をしたのである。安東来治軍曹は現在岡山県勝田郡真加部の三等郵便局長を務めている。老いて益々壮んである。

26、有難き親心の数々

皆木彦八郎君の出征後、父の喜太郎氏は糀屋を営んでいた。両親は度々八幡宮へ参詣して一心に我子の武運を祈り信願していた。然るに不幸にも彦八郎君は幾多の功を樹てたが奉天の合戦に柳匠屯で行方不明となった。一人の男子を失った父は、どうしても諦めがつかない。そこで八幡宮の神前へ参り、

「私は日夜八幡宮へこれ程までに祈願をしているに倅彦八郎は行方不明となった。なぜ他

人の子は助けても、私の子のみ見捨てなさるか」と云いつつ大きな竹杖で、勿体なくも神々しい御神前の玉垣を打ちたたいて落涙しつつ、人目も憚らず荒れ狂ったことがある。

又、　但馬の兵隊に木村一郎と云う上等兵があった。この兵は一人子で誠に取りがえのない子であった。出征後両親は吾子を失ってはならぬと日夜信仰した。殊に母は朝夕灯火を上げて一度も怠ったことはなかった。ある朝父が目を醒まして見ると母はしくしくないている。

「なぜ泣くのか、腹でも痛いのではないか」「いいえ腹が痛むのではありません、一郎が死にました」「そんなことはない、夢を見たのだ」「いいえ確かに死にました。今谷底で一郎は五六人の敵と刺しあって沢山の傷を受けて倒れていますわいな」と声を揚げて泣くのであった。「一郎は死にはせぬ、此間の手紙にも弾はめったに当るものではないと云って来たではないか」「それは前のこと、どうしても一郎は死んだに違いはありません」と泣いて止めない。夢に相違はないと思っても事実のように思われて仕方がない。

焼野の雉子夜の鶴、親として子の可愛いうないものがあろうか。気丈の父も共に涙にく

れてしまった。暫くは沈黙が続いた。父は何を思ったか起上った。そして手を洗い口を漱いで神前へ灯火をあげて一心に夜の明けるも知らず祈っていたと云う。

全く神明の加護か、この木村君は毎戦、最前線にあって、砲火の間によく戦ったが、不思議にも弾は当らなかった。

君は至極健全で、目出たく凱旋した。其後或年勤務演習で連隊に出逢いした時。右の有様を聞いたのである。君は今に、

地方の模範者として農業に従事している。木村君は誠に感心な人で、毎夜必ず父母の布団の縁を押えて床に入ると云う、孝行ものである。当村内でも相当信用の厚い人であると聞いている。

27、安来節の看病

「長畑君、俺の分隊に来たまえ、屹度看病して出す。君が如何に養生しても駄目だ。君が中隊本部に居て、いつも中隊長以下の幹部の前で寝ていては気兼があって、心配でたま

るまい。それでは病気は治らないよ。
今から俺の分隊で看護して出す、今来い」
と、云う。余は奉天の大合戦に疲労した上、相当頭を痛めてる中隊の事務に忙殺した為か、四十度近い熱を出して絶食しているので、肉は落ち、目玉は凹んできた。六尺大の敵兵と格闘した時の勇気はどこえやら、全く元気はなくなった。
薄いアンペラの敷物の上に毛布を一枚敷いて、ころがっていると云う有様であるから、実に、なさけないことであった。幸に、
末滝と云う看護手が余の頭を冷やしてくれる、余はこの病気になってから、故郷を思う恋しい心がしきりに起きて来た。
ほんにこのように苦しいなら、若しや死すかも知れない。幸に是迄は度々の戦に一つの傷も受けなかったに、病で死するは残念だ。病死しては、つまらない。若し死んだら戦死の取扱いを受けたいな、欲なことを思って見た。
同郷から出征している同姓の長畑が来て、

「長畑軍曹殿は病気でいられますそうですが如何でありますか」と尋ねてくれた。

そして、見舞として菓子袋を出した。

「有りがたい、よく見舞ってくれた。俺は戦で死するは覚悟であったが、病では死にたくないよ」

「これ位の病で死なれるような事はないです。先日私の父から手紙が来ました。其中に長畑軍曹のお母さんは毎夜丑の刻参りを八幡宮になされていられると書いてありました、必ず御全快なさるに違いはありません。

どうぞ、心長く養生して一日も早く快方に赴いて下さい」

「長畑、よく云ってくれた。俺は必ず治るよ。まあ銃剣を解いて休んでくれ給え。桝谷やこの長畑へお茶でも汲んでくれ」桝谷は気をきかせて、ビールと菓子を出して親切に長畑を取持ってくれた。

余は衰弱しているも幸に熱が下がっているから、ぼちぼちと故郷の話に時を費した。

暫くして長畑は、

「末滝看護手殿、長畑軍曹殿を頼みます。中隊本部の兵隊さん、どうぞ大切にして上げて下さい」と頼んで帰った。

病がつくと心が弱くなって来る。「若しもの事があったら家族がびっくりするから、長畑君の親へ病状を知らせて置こうか」と

福島君と末滝とが話しているのが、余の耳な入った。そこで余は大患であることを知った。余は毎日時間を定めたように熱がでる。

熱の降った時、震う手に筆を取って故郷へ病状を知らせる手紙を書こうとしたが、

「マテマテ、こんな事を故郷へ申し送ったとて、看護に来る事も出来ず、心配を掛けるばかりであるから、よしにしよう」と、筆を置いた。それよりか、親切に云ってくれる福島分隊へ行って見よう、気が晴れるかも知れない、と、

余はヒョロヒョロ足で牧田に縋って、やって行った。この福島軍曹は余より一年早く軍隊の飯を食っている。中々利口の男である。部下を動かすことは甘い。

病人を求めるは大きな厄介である。然るに余の来たのを喜んで迎えてくれた。

「こら山口は早く寝床を敷け」

「分隊の兵は皆よく聞け。これから長畑軍曹を大切にして慰めて出せ。河本は軍医の元に行って薬を貰って来い。瀬田は粥を焚け。米田は長畑軍曹の頭を冷やせ。某は奈良漬を買って来い。汝はミルクを解いて出せ」

何から何迄福島君は部下に命じて、手とり足とり、看病に務めてくれる。

「ブツブツ云っては病はなおらぬ。愉快でなければならぬ、さあ、これから銘々の隠芸を発表する」

「分隊一同円陣作れー、自己の十八番を出すこと、右より始め」

兵の内には少々躊躇する者もあったが、何分分隊長の命令だと云うので順番にやる事になった。

浪花節、浄瑠璃、おとぎ話も出れば、廻れ右前へー進めと云う号令も出た。中には父上母上いざさらば、私は戦に行きまする、隣におった馬さえも、徴発されて行ったのに、と歌っているのもある。本家本元に近い伯耆の出身である安田の安来節ときては又格別で、

「安来千軒名の出た所、社日桜や、エエー十上山、十上山から沖見れば」と、気持ちのよい声でやる。近所の分隊の兵が外へ聞きに来た。余は幸に脳に故障がない、自然と苦痛を覚えなくなって来た。こんな、

芸道をするにも一杯の酒ものむのではなかった。余は数日間、分隊の兵士が代わる代わる看護してくれ、滋養物は出来る限り与えてくれた。其御蔭で快方に赴き一ヵ月後全く元の健康体に復した。

28、演　武　場

長台と云う村落に舎営することになって、この村の住民を一人残らず皆転居するように申渡した。そこで土人は自分の家をあけて、十町程ある西方の、こんもりした山に行き余等が昨冬西溝山の守備地に穴屋を作ったように、一同力を合せて、各戸別々に、窖室を慥えて、之に住むことになった。

主人等は時々我家を見に帰って来た。

我兵士等は、土人の家屋を手入して風の入らぬよう、壁をつけ、紙を張り、味噌瓶を風呂にして入浴し、家の周囲を清潔にして起臥している。

国の弱いと云う事は哀れなものである。

大切な我家を外国の兵士に譲って、自分は、山の穴家に入って、この厳冬を凌ぐとは気の毒なことであった。余の宿っている、

家の主人は六十四五にもなった男であるが、山の穴家から来る度に、水を汲むやら、風呂湯を沸かしたり、薪を集めて来たりする。

小男で、誠に気軽な、気持ちのよい親爺であった。

長台の家の前の広場に演武場を作ることになった。そこで普請木を集める為、

石田特務曹長は二十名の兵を率いて、北方のある村に行った。そして、

ある家の戸瀬にある柳の木の格好のよいのを見つけた。この木なら云い分はないと思って

一本殆ど無代で貰う考えを起した。

支那語に比較的上手な兵が、その家の親爺を呼び出した。親爺は数多の兵が入り込むの

を恐れて、五拾銭の木代で重ね返事で得心した。さて山根が斧を以て切りかかると、其内から七十歳にもなったような老母が飛び出して来た。

いきなり、切りつつある山根に取付いて、

「ポコペン、ポコペン」

と云い立てて止めるのである。

「こら何をするか、親爺に金を出しているのだ。そこのけ」と叱っても動かない。

「しかたのない、ばばだな」

と、出田が抱えてのけた。何かわからぬ事を頻りに喋るが、我兵は一向構わず切倒して枝を落とし之を担いで帰ることになった。老母はどうしても承知せない。兵の間に入り込んで其大木に組付くのである。

「ぶんなぐれー、けとばせー」

と、口々に云っては居るが、さすがの兵士も、この老母をいたわるのか、誰一人も、たたきも、蹴りもせぬ。この老母は小さな足で、手首には黒い腕輪をはめている。両手を振っ

て、少しも臆する風もなく、勢よく付いて来る。

「こら、ばばあ、よい加減にして帰れ。馬鹿やろう」

と、云う兵があっても、更に感じもない。

我兵は替る替る担いで宿舎へ戻ってきた。此老母は顔に青筋を浮べて、中隊本部前で、小隊長に訴えている。

「このばばは何を云うのか」

「中尉殿、自分等はこのばばの内の戸瀬木を一本購って、このばばの家の親爺に五拾銭渡して得心の上で切ったのです。それであるのに、このばばは承知せず、此処までついてきて、よくばるのです」

「そうか、それでは仕方がない。もう五拾銭を一枚やって帰らせ」

と云うと、

石井曹長は金を老母へ渡した。

老母はさっさと帰って行く。ある兵が、からかって、

「こらまて」と後から追かける風をした。老母は見向きもしなかった。我兵士等は六尺もある強敵には組ついても、この老母には拳一つも振らなかった。

29、この親にしてこの子あり

佐藤と云う三十四五にもなった後備の軍曹が我中隊へ編入されて来た。此人は上下の敬愛が深い人であった。この軍曹は郷里に細君と一人の娘がある。自分とは殊によく気心が合っていた。或日佐藤軍曹は余に故郷から来た手紙を出して「この手紙は自分の娘で十一になる子が書いたのである。恥かしいなれど一寸見てくれ給え」と云うのである。余は何心なく其手紙を受取って見ると、佐藤豊子と書いてある。其文中に次のようなことが書いてあった。

お父さん、ますますおたっしゃで戦争していられますか、お尋ねいたします。お母さんは毎日朝早くから日のくれるまで、お父さんのかわりに、はたらいておられます。わたしは今日学校で先生から書方と図画に甲をつけて、いただきましたから送ります。お父さん

牛の子は太って大きくなりました。お母さんの手から少し血が出て、おばさんがなきました。お父さん又戦争のことをしらせて下さい。

三　月　五　日

豊　子　より

お　父　上　さ　ま

自分はこの手紙を見て第一に感じたことは、佐藤君の妻の努力と、豊子の孝心が胸を突いた。一つ不思議なことは細君の手から血が出たと云うことである。そのわけを聞くと、佐藤君は「実は愚妻は常に手足が荒れるのであるから、多分あかぎれが切れた処へ血が出たのを云うのだ。隣に叔母がいる、それが愚妻の手を見て泣いたと云うのだろうと思われます」と云う。

佐藤君の細君は、主人の出征後、人一倍の勇気を以て家産を傾けまいと思い、朝は星を戴いて田圃に出て晩は月を見て帰ると云う勤勉家であった。近傍の人が仕事の手伝をして出すと云っても、御親切は有りがたいなれど妾が出来る限り致しますと断ったのである。

殊に主人の武運を祈るため氏神を始め所々の神仏へ参拝もした。其上土居内のことには人に劣らぬ程尽したとも云う。女丈夫とはこのような人を云うのだろう。

豊子は尋常四年生である。感心なことには、父が壮健で帰るようにと朝は夜明に起き出で顔を洗ったたら直ぐに近所の森にある、

荒神様へ参詣して紅葉のような手を合せて「どうぞ日本の国が戦争にかちますように、お父さんは無事に帰りますように」と二度も三度も繰り返しては伏し拝み、さっさと帰って、火を焚き掃除までして母に手伝い、自分で支度をして時間に遅れぬように学校へ行く授業時間には脇目もせず勉強して、いつも優等の成績を得ていた。授業が終ると、他の児童は運動場で遊んだり、途草を踏んでいるに豊子は少しも側目も降らずに帰って来る。

母が仕事に出ていると側に来て「お母さん帰りました。之から何をするのですか」と問うのが常であった。母はその答に困ったと云うことである。

この親子の一念は天に通じたか、佐藤軍曹は数度の戦に一つの傷も受けなかった。愈々大勝利で平和克服となった、無事帰ることになった。

鳥取市の入口には歓迎人が人山を築いて、万歳万歳とあびせかけるのである。凱旋兵士は四列で足並揃えて行進している。佐藤軍曹は分隊長で列の外に歩いている。この進行中群集の中から一人の少女が飛んで出た。

「お父さん」と云って

佐藤軍曹に取りついた「あー豊子か」と手をとって数間歩んだ。「お父さん早く帰って下さいな」「かえるともかえるとも、営所へ帰って二三日したら帰るから、お母さんと待っていてくれよ」と云いつつ別れた。之を見た余は「此親にして此子あり、親子は斯くあるべきものか」と、自分も吾子の四つになる輝夫のことを思出すと共に、思わずホロリとんあって両頬を熱いものが下がるのを覚えた。

30、凱　　旋

明治三十八年末から出征部隊は続々内地へ凱旋することになった。余等も三十九年二月柳樹屯を出帆して兵庫の和田岬へ上陸した。

待ちに待った我国民は、沸き返るような熱誠を以て余等の凱旋を迎えてくれる。其有様が海に陸に顕われている。

その歓迎振りは筆舌の及ぶ処ではない。若しや反対に我軍が敗走して帰ったなら、国民はどうしてくれるだろう。

幸にも多くの犠牲は払ったものの、毎戦大勝利を得たのであるから、後援して下さった国民に対しても申訳は十分ある。

和田岬へ入港すると、陸上では煙火が勇ましく揚っている。碇泊している汽船は一斉に汽笛を鳴らして歓迎する。どの船にもこの船にも日の丸の旗が揚っている。陸上を見ると数多の催が出来ていて、歓迎ぶりが十分顕われている。

上陸すると余は、

「ヤレヤレ死なずに帰ったか有難い」

と思った。口には出さないが心で確かに思ったのは余ばかりではなかっただろう。

順番が来て余等も検疫を終えて広場に出た。今を遅しと待ち受けた面会人は黒山を築い

ている。

「ヤアお目出とう。御壮健でなにより結構、君大勝をしたな。君命を拾ったな、君等の苦労を知りながら、ろくろく手紙も差上げなかった。どうか許してくれ給え」

「お蔭で無事に帰りました。留守中は色々お世話になりました。まあー、この壮健のからだを見て土産だと喜んで下さい」

相当数の首もとりましたと云うような手柄話も、はやのぞきかけた。其日午後一時神戸駅で乗車した。此時市民の群集は線側に堵列して万歳声裡に送られた。

汽車に乗って西進すると、海上には真帆白帆の小舟が浮んでいる。沖をはしって居る汽船は盛に黒煙を吐いている。明石や舞子の海岸には、白砂の中に千歳寿く緑の松が翼を拡げたようになって、気持よく並んでいる。この付近には風流を極めたら貴顕紳士の別荘が点々聳えて見える。余は列車の窓を開いて山手に見える、

鵠越の逆落を偲びつつ、敦盛卿の幕を弔った。

「明石ちょっと出りゃ舞子が浜よ、沖に見ゆるが淡路島」

と歌っている。ほんに淡路島が手に取るように海を隔てて南に見える。何時通って見ても景色のよい、見るものをして目を喜ばせぬものはない。

再び我日本を見ることはないと覚悟して出た余等が、又々この山水明媚の親しい祖国を踏むかと思えば其愉快さが何に例えてよいのやら判らなかった。是と同時に暗涙に咽ぶものがあった。それは余と同時に出征して満州の土と化した戦友の憐れなる思出であった。

間もなく姫路駅についた。此処でも神戸に劣らぬ歓迎振りであった。

何町であったか一寸忘れたが、大隊本部の宿舎に行って、我中隊本部の宿所を聞いて、其指定の宿へ十人の兵を連れて行った。

そして其家に入ってお宿を御願い致しますと云った。然るに如何なることか主人はろくろく返事もせず直ぐ何処かえ出て行った。

すると一人の役員らしい男をてれて来た。其役員は云う。

「兵隊さん、実は数日前この内に不幸があってお宿の都合が悪いからお断り致します」

と、すげない言葉で、きっぱり云って、さっさっと逃げてしまった。

余は仕方がないから町の中の一側に十名の兵に叉銃させて暫らく待っていたなれど、役員は何んにも云ってくれない。一時間以上になるに何等の通知もない。

気のよい自分もこの時は腹がたって仕方がない。我等は満州で二星霜も寒暑と戦い、強敵と鎬を削った勇士である。そして疲労しきった兵士を何時までも待たせるとは失礼であると思った。そこで余は其断った役員を尋ねてある家に行って見ると、其町の人々が数十名も集って何か相談している。自分は、

「皆さん、私は最前から御承知の通り十名からの兵士をちれて町中に立っています。然るにお宿を断わられて、今に宿る処がきまりませぬ、如何の次第でありますか、それともお宿がなければ露営でも致します。二年間も満州にいて相当露営の経験もありますからね」

と軍人言葉ではっきりやった。

並居る連中は声を揃えて、

「マアーすみません、今きまります」

と云う。

其内の一人が立って、

「それでは私の内へお出で下さい、お宿を致します」

と云って案内してくれた。

余等は途々多大なる歓迎を受けつつ、

大原町に帰る。道路の両側には歓迎人を以て充されている。先ず第一に楽隊が勇ましく鳴っている。前方の岡には切目もなく煙火が揚っている。小学児童を始め中学以上の学生生徒が整頓よく並んでいる。手に手に国旗を打振って万歳万歳と天地も崩るるかと思うような歓迎を受ける。郡長を始め町村長に警察官に、軍人会長や青年団長、其他の方々は正しく並んで誠意を以て迎えくださる。小学児童以上は凱旋唱歌を歌っている。

「芽出たく凱旋なされしか、ご無事で御帰りなされしか、お国のために長々と、御苦労様でありました、お送り申した其時は桜の花がまっ盛り、武士の誉だ潔よく、散って帰ると出られたが」と七つや八つの子が愛らしい声で歌っている。この歌を聞かされて天にも昇

る心地がした。満州の風雨に晒され、強敵と雌雄を決した兵士等は、頬骨とがりて肉は落ち、鬚は茫々と生い茂り、一度に年をとったようには見えるが中々活気はある。

四列縦隊で行進している。先頭には喇叭手が並んで各々口に当てて吹き鳴らしている。「トタテタテ、タテ、チチチテチラータ」と吹き揃えて勇ましく進んで行く。

苦労して始めて愉快に接せなければ真の愉快は得られぬものです。この時自分の足が地につくのが覚えぬようで、其嬉しさが何に例えようもない。夢か、うつつか、町端れに行くと余の出征前迄奉職していた梶並小学校の瀬実校長を始め職員児童がいる。村長富阪君を初め故郷の人々が一同笑をたたえて歓迎してくれる。

「やあ長畑先生」と云うものもあれば、「長畑軍曹お芽出とう」と云うものもあった。このように四方八方から一度に挨拶を受けた。八十に近い長畑忠兵衛翁は、列中にいる自分を見るや、右手を翳して「亀さんか、お目出たい」と云われたことが今に忘れられない。

父母も喜色満面で三里余を徒歩で出迎えてくれた。

凱旋兵の通過の場所は歓迎騒ぎで満たされている。老いも若きも総集合で労うことにの

み努力している。所によれば、特製の凱旋菓子や小さな国旗までくれた。兵士は此の国旗を勲章のように胸にさして行進する。智頭町の宿では八頭郡からとて四斗樽の酒も来た。

凱旋門は至る処に設けられてある。中には何千何万と云う大金を出して一人で建てたものさえあった。各所とも思い思いの歓迎ぶりは凱旋兵士を如何に喜ばしたか、その時にいた兵士諸氏は感激無量であろう。

31、悲喜交々到る

凱旋帰途釜の口と云う村中で休憩した。此村に安藤芳蔵と云う上等兵があった。この安藤君は自分と同じように野戦隊に加わって満州に転戦した。

安藤上等兵の功績は随分多かった。然し惜しい事には、彼は遼陽の攻撃の際、南門外で名誉の戦死を遂げたのである。

此村は何れも戸障子を開放して、国旗を出し総出で歓迎している。縁側には土瓶と湯呑

みが並べてある。

「兵隊さんお茶をお上がり下さい」

「有りがとう・・・・頂戴いたします」

「兵隊さん、大戦をされたがお怪我はなかったのですか」

「度々弾の中をくぐったなれど幸に一つの傷も受けなかったのです」

「有りがたい事でしたな。迎える私等も嬉しいが、凱旋なさる兵隊さん方は、まあー、どんなに嬉しい事だろう」

と、云ってくれる。

すると、隣りに向い合った二人の老媼は云う。

「こんなに沢山兵隊さんが帰っていられるに、芳さんがおられぬとは思えません」

「本当に、そう思われますな」

「芳さんは去年の十月に遺骨となって帰っているのであるから、

この内にはいられますまい」

「芳さんの親衆はどんなに思っていられるだろう、誠にお気の毒なことです」
と云っている。
余はこの話を聞いて、
「おばさん、安藤芳蔵さんは満州の遼陽の戦争に名誉の戦死をされたのです。誠に好い上等兵で功績もあったが惜しいことをした。あの芳さんの内の戸が明けてないが誰も居ないのですか」
「いいえ、親衆が居られますが、大方芳さんが死なれて凱旋が出来ぬから残念でたまらず外へ出る気になれないのでしょう」
と云っている。
余は後日此処を通って帰る際、よく聞けば、其時両親は上等兵の位牌の前に端座して念仏を唱えていたと云うことであった。
君国のためとは云うものの、杖柱と頼む、愛子を失う人の悲しさは、何にも例えようもない、気の毒なことであった。

凱旋兵士万歳万歳で喜ぶ人と、斯のように悲しむ人とあった。

悲喜交々至ると云うはこの事であろう。

余は之まで書いて、ざっと体験したことは尽きた。

要するに戦争ほど残酷なものはないが、又是と同時に、斯の如き、忠君愛国心の著はれたこともあるまい。我が天佑と陛下の御稜威の賜と、我国民が一致共同して後援の実を顕したのと、我出征軍人が思い切って腕を戦場に振ったために、世界の強国を見事に征服して戦勝国の名を得たのである。

この大勝を得るに当り、我国民を代表して護国の鬼となった、我忠勇なる同胞のあることを忘れてはならぬ。

余はこの英霊を慰めたいと思うと同時に、

治に居て乱を忘れぬと云う気持で、従軍余話一老兵の思出として、当時の有様を執筆した次第である。

完